

~~290~~
~~598~~

0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^m 1 2 3 4 5

始



誤 正

| | | | | | | | | | | | | | | |
|----|-------|-----|-----|-----|-------|------|----|-----|----|----|----|----|----|---|
| 互ふ | 研究せるに | あれば | 状態 | するこ | 本能の知覚 | 續くなり | 依り | 變化の | 雜查 | 本義 | 然し | 國王 | 讀語 | 誤 |
| 互に | 研究するに | よれば | 状態に | するも | 母精の知覚 | 行くなり | 寄り | 變化。 | 雜查 | 社會 | 然り | 王國 | 讀語 | 正 |

| | | | | | | | | | | | | | | |
|---|----|----|----|----|----|---|----|----|----|----|---|---|---|---|
| 全 | 五三 | 五一 | 四五 | 四二 | 四一 | 全 | 三二 | 二七 | 一三 | 一〇 | 四 | 二 | 一 | 頁 |
|---|----|----|----|----|----|---|----|----|----|----|---|---|---|---|

| | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 五 | 一 | 一 | 一 | 五 | 七 | 九 | 七 | 三 | 七 | 六 | 七 | 一 | 一 | 行 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|

| | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|---|-----|---|----|----|-----|------|-------|----|-------|-------|---|
| なま | 空間 | 力 | 遂行を | 間 | 忍せ | 敵應 | 出來る | 大なる | ためとして | 寄近 | 惡からしむ | あるなど、 | 誤 |
| なる | 空間 | 方 | 遂行を | 間 | 忽せ | 適應 | 出來事 | 大なり。 | ためにして | 近寄 | 寒からしむ | なるなど。 | 正 |

| | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---|----|----|---|----|----|---|
| 二三六 | 二〇三 | 一六五 | 一三四 | 一一六 | 一一三 | 一〇七 | 全 | 八一 | 七四 | 全 | 六七 | 六六 | 頁 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---|----|----|---|----|----|---|

| | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 九 | 四 | 二 | 五 | 三 | 二 | 八 | 五 | 三 | 〇 | 一 | 七 | 七 | 行 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|

特107
940



接神術より見たる蟲の精

大正
12.11.15
内交

序 文

吾人は生に居て生を知らず、死を知らず、況んや其死後の如き、廢人の譚語として顧みざるも世論は既に生の意義は靈化するに有りとなし、學者の人靈に對する造詣は宗教家の其れと待ちて大に深奥なるものあり。其傾向に於ける、全地球到る所靈界を説くものの勝利なるを信せざるはなし、然れども信ずるは未だ不定の域なり。此域に於いて靈を口にするの不利なる事あり大にしては廣く全人類を禍ひする事も有らん、と思意せらる可き出來事の幾多存するは暫く唯物論者の存在を許すものにして靈界の不安定なる國に有りては、其歴史に徴して國家的政略の元に適當の制限を必要なりとする者なり。又一面には有意義なる、靈界の研究に連れて、其眞理を獨

専たらしめん事を思ひ、歐米等に於いては不可思議なる幾多の權道學者有り。要するに物質界の西歐に指を屈するに對して東洋に於ける靈界の感念の發達せるは等しく吾人の許す所なり。此秋に當りて虫の精の研究の如きは最も過失なき研究資料たらずんば非らず。

本 能

彼の蜜蜂、蟻の社會は恰も人類の國王にも似て吾人の彼等の社會に對する知識も亦大なり。其階級に於ける禮讓と義務の如き、異團に對する權利の主張に伴なふ慘膽たる争鬪の如き、或は他の虫類が自由平等なる共棲に於て、吾人人類の模範たる可きものあるは思ひ半ばに過ぎず。こは等しく彼

等にも彼等の過去に於ける永き時代は幾多有意義なる不文の歴史なる事を物語るものなり。

余は多年研究の結果赤裸々に「昆虫の本能とは虫の精（虫ノタマシイ）の知覺及び教示なり」と云ふ結論を得たり。然し吾人は昆虫の精を見る事難きのみならず、人類の靈すらも其存在の説明を各箇に要求せられんは如何なる靈術者にてても難事とする所にして、往々靈を説く者を愚昧なる宗教の徒となし或は無稽を力説せんとする精心病者の狂態とし、又適々意を留むるものも、只特殊の現象なりとし、敢て眞摯を欠く者多し。蒙昧の世に於て、不可思議を語り、靈を説く者多かりしも文明に連れて確固たる現實に生きんとする傾向を有すとは近く且狹隘なる見解にして、此物質文明も宗教の潛勢力に因りて其大なるを得たる事は云ふまでもなき事なり。現代文

明を人力のみにて開發せられたり、と意思するものあらば、狂者以上の狂者也。顧みれば、近き半世紀に於ける開化は實に驚く可きものにして、伊太利に於ける電氣の發明以來幾多電氣に關する發明を見、一方に物質的に貢ぐこと大なると同時に、又一面に、我地球の全面に如何に不知覺なる活力の旺盛せるかを暗示し、無線電信電話等は間接に無形の物体を吾人に造り出さん事を命ずるにも似て、如何に現代の文明の神秘化し行くかを見れば、吾人は只神人交合の世の近きに開けたるを思はざる能はず。然し現代を人類の文明なり、と意思するは心なきの極なり。

先づ人類の神秘は謂はば、虫の微に現はれたる秘事を究めんは頓て人類の秘事に入るの序たらんことを信するなり。昆虫の幼虫が、暖かき季節を前にして發生し、其の暖かき光線に教へずして趣くを見よ、如何にして卵よ

り出づ可き時を知り、如何にして匍匐し、如何にして食を求め、如何にして發育し、如何にして幼兒を産み、如何にして死すかを思ふ可し。其他風に備へ、雨に備へ、寒暖に備ふる彼等は、廣漠なる天地に有りて餘りに可憐ならずや。彼等に友情あり、戀あり、將亦無性に對する愛有り、欲望有り、美醜の淘汰、好否の選定等、其れ神秘なる哉。然れども宗教家の語れる如く直に神靈の崇高なるを説くは餘りに單純なる嫌ひ有り、余は強て虫の精を虫の魂と讀み、其合力を虫の神と呼び、本能は其虫精の教示なりとす。此一小虫類の社會に自から幾多の差異を生じ、人類の指紋、人相の十幾億、悉く異なれる如く其連命も一々異なり、一として同一軌道を行く者なく、其他頭髮の色、其方向、長短等、一ツとして同一なることなきは、又虫類の社會にも適應す可。彼等の連命も亦等しく同一なる能はず。幾十

億萬の差別を幾十億萬の方面に見出すことならん。過去に於けると等しく来る可き將來に於いても、尙幾十億乃至幾千億の差別を生ずるならん。假に昆虫の社會に人類の宗教なる者を適用して考察する所有らんに、如何なる宗教を吾人は擧ぐ可きか、勿論笑止なることなるも、宗教家が觀察したならば如何なる結論に到達す可きものなるか聞きたきものなり。自分の素人觀としては先づ少なくて、基督教にあらざる如く感ぜらるるなり。試みに考へよ、斯く幾千億の異なりたる事象に對し其れ丈雜多なる、辨別と技巧とを有する全智全能なる意識物を想像せんに、複雑微細なる現象に對して餘りに茫漠不可捉なる抽象に非らずや。人類の生存上斯かる原生的にして無責任なる空想的約束を信するには、餘りに複雑にして而も明晰なる頭腦を現代人は有する觀なきを得ざるなり。凡そ生物は熱と光線と水とに生

く、而して人類の熱と光線とに對する觀念と學理的考究とは過去の如く將來に於ても、主要なる重大問題たらざる可からず。然して年々否一度に十幾億の石炭を熱化するも、初夏の一日にも足らざるに非らずや。幾百億デルの石油、幾千億燭の電燈を點するも、尙白晝の一瞬たる能はざるには非らざるや。熱と光は如何に人智の發達せる文明人の子孫に於きても、將亦全知全能なる神慮を通して求め得んも、彼の太陽の一隅を語るに過ぎず。此點に於て寧ろ拜日月教は吾人に取つて理解し安きものの如く、殊に吾人大和民族に取りては基督教の所謂全知全能なる神を想像するより遙かに易々たる如なりさりとて熱と光のみを生物の神と云はんは反て詩趣を損するものなり、且熱を理會し光線を理解する不可思議なる意識物即ち生物の精及び人靈の力を待たざれば恰も墓石を強き日光に直射させた光影位のもの

にて無趣味なる寂寞の外何等意味をも持ち來らざるなり。
加之、遂に神の意義をも理解し能はざるに至るべし。

然れば靈能の力或は合成力をも神として信仰するに至りたるは當然の事に
て意義なきものに非らざるなり。

其他引力の如きは太陽の絶大なる神性を証明するものにして實に此の引力
てふ不可思議なる力の存在することなくして生物の發生を想像し得べきも
のに非らず。

引力と生物との關係に就ては後に少しく説明する所有るべく茲には只宗教
として論ずるにてはなく「神」なる用語の説明として述べたるまでのこと
なり、宗教上の問題として論ずる場合には勿論吾人が信せんとする神性の
實在不實在を論究する以上に既存宗教の人類の社會に與ふる結果の如何

より考究せられ得べく、殊に人類の文化がより多く自然を彼等社會に最も
都合よき如に類化し、利用することを意味する如く、宗教即ち靈界の文明
(或る意味に於て)も等しく幾多異なる宗教の發生に連れて、各異なれ
る文化を構成せられ得べく必ずしも虫類の如き自然的社會狀態若しくは生
存狀態に留まり何等自然を彼等自己に都合よく類化し、利用し得ざる生
物に現はれたる靈理を以て直ちに最善最良なる宗教と見做し難きやも知れ
難し。

故に上套の如きは宗教の少長論に非らざることを註釋し置く次第なり。

人靈は万物の長なるも其靈能が直接昆虫其他の動物を支配するものにては
非らず、昆虫に有りては其生死發達の不可思議なる現象は等しく人靈の人
類に於ける如く、昆虫の精が昆虫を支配し、彼等の生死は彼等の精の知覺

示命の如何、によりて異なりたる現象を出現するなることを記憶す可きことなり。斯く他動物は、それ／＼各自の神を有する如く、昆虫にも昆虫の神有り、神は即ち精の合成力にして其社會の複雑なる如く複雑なり。彼等の精の増減、多寡、年代、等は彼等の神の偉力、開化を物語るものにして其時代と共に推移するものなり。

彼等の現時に於ける本義は、原生の祖乃至幾千年前の祖に比して、より複雑なる神を構成し居ることは容易に推理し得べきことなりとす。

昆虫の本能は斯く精の知覚、教示、のことなれば本能の研究とは即ち精の研究を意味することなるは、説明を待たざらん。只精とは何ぞや。曰く數理的に示せば（ $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$ ）なり。何人も解し安くして認めがたく、知り安くして知覚し難し、凡そ生有るものは死有り、死有れば精有り、精

は生の意義にして同時に死の目的なり。斯くの如く精は不知覺なるものなるを以て本能を説くも亦易々たる業にあらず。然れども昆虫の如く、無數に存在して吾人と常に親み、且彼等の本能の吾人の注意を價ひするものも數限りなし。我國の如く氣候潤濕にして、百草四時青く、昆虫の發生容易なる所に於いては、其種類も極めて多く、動物學上價值有るものも多からん。従つて昆虫に對する研究も非常に盛にして、見る可き著書の多きは宜なるかな。然れども動物學に於ける本能は吾人が研究せんとする本能とは少しく見解を異にするを以て再び本編に於て吾人の立脚地より研究を試みんは、徒勞に非らざるのみならず、本來の目的なり。されば勉めて平易なる、動物界の出來事を取り來りて叙述せんとす。

春の初め若葉の頃より、野に、山に、庭園に、或は人家に近く到る所、昆

虫の幼兒の蠢々せざるはなし、或は直接間接に吾人に禍ひする虫類も多からんも、營々たる小さき生の營なみはいちらしく、亦可憐なるものなり。彼等の初めて天地の間に蠢動を初めたるは、他日成虫となり、同種同形の子孫を遺し、精化して彼等の生の意義を完ふせんか爲なり。我東洋は勿論西洋にも生物を研究するものは、等しく生の秘事なる宿命を説けるもの多し、或は受精の際既に細胞の核中に各生物の運命は豫告せられたり、となすもの或は其肉体に書かれたる神秘の文學を實現する、となす者、或は再生同軌説を信ずるもの等、區々として多岐なると云へども、大觀すれば遂に同形の虫に同様の運命有りとせん。同種族は季を同じうして生れ、又季を同じうして去る、食餌の如きは其種によりて等しきなり。而して顧れば又一も同一なる者なし、幼虫の本能も、勿論複雑なる現象を示すならんも

先づ吾人の取る可きは趨光性ならん。試に庭園の樹木に附ける幼虫の卵を見よ、必ず雨露を掩ひたる大きな枝の下に南を受けて、確く附着し居るを見るならん。卵殻を捨てたる幼虫も、等しく南面せる明き所に蟄するを見ん。今其幼虫を取り來りて細き枝に移せば、彼等は周章として蠢動するならん。蓋し彼等の安寧を損せられて、再び彼等の落付く可き適當なる安全地帯を求めんとてなり。而して幾多雜査の後、如何にして彼等は其の然る可きを知れるか、何時の間にか其枝の南面する方に恰も云ひ合せたる如く寄り集へるなり。再び其枝を磁石の如く南北に置きかゆれば、暫時にして其の南端に集中するを見ん、之即ち幼虫に於ける本能の力なり。「何如にして南方を求むるや」は至難なる解釋なれども「何故に南方を求むるや」は易々たる解釋なり。曰

く生物は熱と光に生くるものなり、と云ふは生物學の常に示す所なり、「何如にして南方を求むる哉」は「本態は如何にして知るや」にして異論の生ずる所ならん、而も吾人が等しく知らんとする所にして追次其概念の一致するを見ん。

昆虫の趨光性は單に彼等の生活に必要なものみに留まらず、往々其變則なるものあり、彼の蝶、蛾の燒死の如し。尤も昆虫は大抵皆光線を慕ふものなるが、中には日中眠りて暗き夜に活動する蛾及び蚊の如きものあり。然れ共是等のものも眞暗なる所よりも、電燈の光や燈火を慕ひ、遂に焦死するに至るものあり。「蝶が戀がれて會ひに來た、死ぬるかのごで會ひに來た。」なぞ粹な聲で歌はる、時吾人の心は何となく吸ひ込まるゝ如に感ずるものなり。實際吾人の情緒をそゝる程、燈火に對する昆虫の愛の現はるゝ

ものなりや、否やと云ふことは、一寸誰れしも考へて見たくなる問題なれ共、其大部分は複雑なる、人類の同情が可憐なる小さき昆虫の美しくしき最後、與へたる餘韻のみにして、虫に燈火を死ぬる程好愛する、熱烈なる愛の潛み居るものなりや、は少しく考究を要するものとす。

今假に初秋の日など、障子を立て込めて端座する時、諸子は光線を慕ひて、終日障子に挑む蠅の群や、物影に隠れんとする、蚊の群を同時に見出すことならん。少しにても明るき方に行かんとする蠅も、暗所に潛まんとする蚊も共に光線に對する微妙なる知覺を持ち居ること、は争はれぬ事實にして、只蠅は明るき所を愛し、蚊はくらやみを愛するならん、と云ふに然らず蚊も時に電燈を襲ふて倦まぬものなり。されば彼等の光線に對する好愛は、性向の一事のみに存せず。其程度こそ異なれ、蠅も蚊も等しく光線の

刺戟が活動力の動機となり居ることは云ふまでもなく、蚊の如きは、音に日光の如き強き光線に對しては、人間なれば先づ眩暈する時の如きものにて、非常に眠むくなる者なる可く、然し適度の光線が其活動に必要な原因なることは勿論なり。

而して此精なる者が、光線を知覺し如何に好愛の念慮を抱くや、を考究せんに、吾人は通常、虫の精の微妙なる知覺力を有して、日光より來る光線の波動、或は熱線の振動によりて其振動を傳播し、一種不可思議なる状態に入るならんか、若しくはエーテル或は未發見の浮游元素或は電子等の作用するありて、活力を鼓舞する如き作用有るならんか、と思爲せしに、實際に於て光線の知覺は昆虫に附着する精が有機體を通じて知覺する者なることを確むるを得たり。然らば精は光線を直接知覺せざるものなりや否や

と云ふに勿論過敏に知覺するものなれども、目の作用其他の方法に因りて光線を集中する作用は、遙かに其直接知覺するものに比して明瞭なるものなる如し。況んや物体の鮮明に知覺し得るは、其れく網膜等の作用に待つ事等總て生理上の説明に等しきなり。其の網膜上に映じたる光線、物体等の像影によりて如何に精の知覺を刺戟し、其刺戟が如何に活動力をそゝるかは、説明に苦しむ所なるも、要するに人類各自が暗黒より光明の世界に移りたる場合の如く、如何に其現在、或は知覺し得べき近き未來に於て悲惨なる境遇に入る可かりしとは云へ、其瞬間に於て謂ひ知らぬ快感を懷く可きことは、容易に想像し得可く、例へば囚人を目隠しせしめて法廷に連れ出し來り、頓て冷かなる死刑の宣告を受く可き可憐なる運命に於ける身も、法官の前に目隠しを取り外され、暗黒の不知覺より光明の知覺に入

れる一瞬は想像するに難からざるなり。此知覺に馴れたる吾人、目の具有する普通の人類に有りては、其一瞬時に比して鈍き知覺にさまで有視覺の幸福を感ずるものなきも、起床の一瞬に於いて同様なる快感を覺ゆるならん。或は暗き室内にて幻燈を撮影せんに、俄かに暗黒の中に人影、或は風光を像出せんか、吾人は等しく快感を呼ぶならん。活動寫眞の如き、一瞬々々に其光影の變轉するものありては、遙かに幻燈の風光に對するよりは、永續的快感を知覺するならん。斯く生物は等しく、只に暗黒より光明に移りし一瞬時のみならず、常に光明の中にありても其光線の網膜上に與ふる刺戟の變遷に應じて、新らしき快感を傳ふるものなり。尙且悲惨なる光影の與ふる網膜上の刺戟すら、極めて微細なる瞬間に於て異様なる快感を與ふるものなり。蓋し其悲惨なる光影に對する感情の誤認、表情の矛盾

盾せざるは、其極微なる一瞬時に次ぎて急速に來る可き理性の判斷によりて、其快感の打消さるゝ爲なり。斯く光線の網膜上に與ふる刺戟は、常に快なる情念を與ふる者なるが故に、比較的理性に乏しき昆虫に有りては、常に如何なる光線の與ふる網膜上に於ける刺戟も、快感を持續する者にして、實に其光線の強弱は直ちに快感の程度なる可し。燈火は日光より強度なる能はざるも、暗黒なる背面に對し、彼等の網膜上に與へたる刺戟は意外に強き者なる可く、殊に前述の如く其刺戟より來れる快感が、強きエネルギーに變じたるものと見るも差支なく、而して遂に其活力なるものが、脱線的となり、抑壓しがたくなれるものと見る可く、勿論虫にても常態に非らざることば白晝彼等の生敵に對する、冷靜なる防備的本能の働きに徴して知る可きなり。視覺より來たる刺戟により、虫の本能は斯く連續的快

感を感じる者にして、彼等は小兒が比較的愉快に生活し、小女が何を見ても喜ばし氣なる如く單純なる彼等の感情は常に喜びを以て満ちたるなり。況んや成熟して羽化し、翩翩として野に山に、廣く自由に自己の本能の命するまゝ、其新しき、刺戟に夢の如くあこがるゝ、彼等の得意は思ひやらるゝなり。

白、赤、黄、紫等、色取々に花咲き競ふ、温かき日に、此所、彼所、連れつ絡れつ、終日嬉々たる胡蝶の番ひはなれの睦まじさは、吾人、人類の等しく欽羨する所にして實際無邪氣なる彼等の快樂は到底狡知にして煩雜なる、現代人の模し難き所なり。而して視覚より來れる刺戟と云ふも、實は目に與へたる刺戟に對する、母精の判斷を視覚と云ふ可き者にして、從つて此連續的視覚の快感とは、其瞬間的精の判斷が連續したるものなり。

其強弱緩急を點接したる者は、即ち彼等の目に映じたる物質に對する彼等の感想なり。彼等の外界に對する感想は、要するに、鏡に映する物体に等しきものにして、彼等の心理状態は單純なるも、外界の複雑なる爲、考究も容易ならず。其辨色力、嗜好等も、彼等の種類と生活状態とに因りて異なる者なれば一樣ならず。然れども余は動物學者の擬似色、保護色、警戒色、等の外觀的分類法に一義を附加して昆虫の体美を以て直ちに精の自然界に對する嗜好、辨色の能力により遺傳、進化し、來れるものなりとせり。例へば木葉蝶の、木の葉に似たる黄蝶の黄なる、天牛の斑らなる、蠶繭の草色なる、各彼等の外界に對する趣味を物語る者と云ふ可きなり。然し彼等は自然色に對して美醜の觀念を有せり、と云ふ可きか將亦彼等は生存上の必要より取捨の觀念を有す、と云ふ可きかと云ふに、未だ美醜の觀念

有りとは云ひ難きも、單に生活上の必要以外多少美醜の觀念なしとせず。然れども彼等の体美は寧ろ美醜の觀念、或は生存上の取捨能力よりも彼等の本能に於ける強き誇りの遺傳なることを信ずるは過ちなからん、此誇なるものは直ちに美より來れるものなるかに就て見るに彼の天牛の斑なる如き自然界に稀に見る者にありては、少く問題にして彼等が幼虫時代より、常に老木を鑿穿して往々、木の表面の斑に美しく彫刻したらん如きを見ることあり、彼等に取りて此表面の強き光線に射られて、強き反射の畫き出せる、網膜上の影を母精は美と感ずるや、齒力によれる勞作の偉大なるを誇りとするや、と云ふに彼等の構造及び性向より見るに、美を誇示するよりも寧ろ頑強なるものあるは、即ち彼等の母精に對する強き印象は、美よりも寧ろ自己の力、或は其結果より來れる技巧に對する強き誇りより來れ

るものたるや明白なり。彼の小紋蝶、揚葉の蝶、の如き複雑なる多くの美を有するものありては、より複雑なる關係を有する可く、又彼等が勉めて單純なる自然美なる眞紅、純白の花に狂浮するは、益々複雑なるを意味するものなり。然しながら自然色に對する母精の印象を昆虫の体美が証明することは疑ひなきものにして、印象の大部分は網膜上の刺戟に因れる母精の知覺なることなり。斯く複雑なる体美より彼等が對する自然色によりて母精に與へたる感想を見出さんことは、中々煩雜なる可からんも、大体に於いて其性情を考究し得べきものなりとす。

但し單純なる色にして、尙考究を要するもの多々あり、紫、赤、黒、等の色に就て見るに紫色の如く美しき花を有するに係らず、昆虫の体美に欠くを見れば昆虫に取りては其人類に於ける如く、注意を引かざるものの如

し。
 思ふに紫は老衰の色にして、昆虫の如き幼稚にして活動力の旺盛なる者にありては他の色に比して母精の留意少なきにては非らざるか、赤色の如きは萬山廣野花有る所、何處に於ても見出し得べく、又花による昆虫にして、赤色の美に酔はざるものなし。人類の網膜上に於ける色の強度は、如何なる可き哉、知り難きも小兒の本能をして實驗すべくんば、吾人に直に赤色の強き集中力を認むべきなり。昆虫に於けるも亦等しく赤が有力なる様にて、彼の黄、白の遠距離に於て別ち難きに反し、赤色の顯然たるは強き牽強附會の説に非らざるなり。況んや昆虫の多く牽引せらるゝは、彼等に與ふる印象の偉人なることを証するものにして、何人も異議なきなり。然れども不可思議なる現象は彼等の生に於て最も親しかる可く、且記憶の最も

深かるべき赤にして、彼等の体美に表現すること稀なることなり。斯く觀じ來たれば彼等の体美は強き精の誇りより遺傳したるもの以外に、原因ありとせば、其の母精に於ける強き記憶にして、然も少なからず理性の働らけるものなる事の結論を來し得べきなり。同時に赤は諸色中、最も強き牽引力を有し、又最も強き活動力を與ふるものたることなり。然れども体美に現はれざる如彼等の本能の勉むるは、保護上重大問題たることならん。而して、黒は自然界に適々黒色の石等の散在するあるも、彼等の生活上、最も親しめる植物界には極めて少なき色なるに反し、昆虫の体美に現はれたる色の最も多きは、其色なる黒色は彼等に取りては、警戒色にして、其性質より云へば赤の正反對なり。彼の赤の集中的なるに反し、黒は退隱的なり。親愛的なるに反して威嚇的なり。

萬物の靈長なる人類の頭腦を以てするも、尙晝夜の標語として赤、黒を用ひし如く、例へば英語にて「ダーク」、我國にありては「アカルシ」、「クラシ」、等其他支那及び各國語に残れる、皆明白に黒赤を以て直ちに暗明を表し示せしこと、只に言辞上の綾のみならず、心理的に不分明なる時代ありしは逆睹し難し。昆虫に於て尙且然り、黒、赤、は晝夜の與ふる印象に等しく、黒は夜の恐威によれる本能の恐ろしき記憶とも見るべく、赤は晝間の明らかなるに似て、其強敵に備ふるに不利なるは明らかなり。其桔草に巢く虫は淡褐色にして、葉に寄る虫は綠色なる、等母精の自然色に對する觀念は各複雑なるべきも、其最も彼等の強き印象を遺すものは、彼等の平常最も好んで生活する週圍によりて、も知るを得べく、寧ろ美醜を以て判ずべきよりも、遙かに生存問題に密接したる取捨の力によれるものも亦なし

とせざる事なり。

上述の如き本能の働きの大部分は、網膜上の刺戟より來ることなり。自然物の網膜上に於ける、影の變化の他生物に對し、或は相互間に於ける、動作によれる刺戟の、變化によれる本能に、關しては、多く動物書に詳説せらるゝ所多し。本論に於ても、卑近なる例を雜然と記載して、生物及び昆虫間に於ける本能に就て概念を得んとす。

敵意なき異なる虫

或る夜徒然なる餘り空嘯きて居たるが、何處よりか飛び來たれる、馬追のすらりとして、しまり善き体を電燈の傘に現はしぬ。是れはいと珍らしきことなり。今にすいゝ鳴き初むることならんと思ひ、興付きて靜かに視てありしに、彼れは電燈が如何にも氣に入りたらん如く、右へ廻

り左りに廻りして居たるが、遂に傘の裏面に廻りて、ミルク色の美しき光線の傘を透して来るを、如何にも見惚れたらん如く、餘念なきに余も何時か釣り込まれて、尙も熟視し居たり。馬追は絶えず長きく觸角を動かして、時々爪にて傘を引掻きなぞする丈にて、何の變化もなきに、もごかしく思ひて、追ひやらんかと思ひ居る時、ふと蚊が舞ひ來たりて、二三回馬追にからかひたる後、間近かに一寸止まりぬ。馬追は大きにちよひく觸角を動かして、青馬のあかく如き態をなし、蚊に愛相をし、互に敵意なきことを悟らしめぬ。少なき蛾も來たり、ひらくくして止まりぬ。馬追はぐるく廻りなぞして、長い觸角をちよひく動かして、皆御互ひに了解を保つらしきなり。

大理石の敷きつめある大會堂へ、異なりたる虫々の客を請じたらん如く

先住者なる馬追が獨り電燈の傘の上に取り持顔なり。後より來れる蛾も、觸角を動かして如何にも満足氣なる面持ちなりき。彼等は御互ひに彼れは何虫なり、少なき態をなし居る奴、彼の虫は氣取りやなり、なぞ一々辨別ある如なり。而も敵意は寸毫もなし。斯くて廣漠たる荒れ野の果ても、虫類に取りては「エデン」の園なるべきなり。而して彼等には、動物は動物、人間は人間、の辨識あるらし。彼等の眼中に映ずる人類は神の部類なるや、將鬼の部類なるや、興味ある問題なり。

見て思ひ出す

彼の初夏の候より、秋遅くまで、人畜を惱ます悪むべき蚊も、稀れに罪惡を犯さずして一生を過すものあり。つまり血の味を知らずして了るものもあらん。試に一家に四人の家族住みて、蚊軍の勢を凡そ百匹なりと

すれば、六月の初め頃より十月、遅くて十一月迄でも、毎夜突撃を逞しうするも、亦人類にも奇計あり、其れく、蚊取線香、或は蚊帳等、馬にも、犬にも、戦闘準備怠たらねば、中々蚊軍も各員の満足を得ることは難かきものなり。一夜に一人、五箇所負傷するも、四、五の二十、五ヶ月間にて三千回、百匹に配當して、血の御馳走は蚊一匹に取りて一生の間に、たつた三十回にしか當たらざるなり。中には勇猛にして、敏活なるものありては、一生の中に百回以上も御馳走を齎断せしとすれば、後れて生れたる虚弱なるものありては、遂に血の味を知らずして生を了るものあり。まして生物の稀薄なる深山などに發生したる蚊は、絶えて生物を襲ふべき機會に接せず、彼等の大切なる本能が忘れられて終ふならん、かど云ふに然らず、視線に因れる母精の知覺、傳染、に因りて

本能を傳統し全然生物に寄らざる様に退化し了るものにてもなきやうなり。血袋の様に脹れ上れる一匹の蚊に感染し、血の香を修得したる無汚の無數なる精が、如何に幼虫に暗示するかも思べし。

虫の醫術

群生する虫にして、「カコロイチ」とて釜子に類する虫は恐ろしき傳播力を有し、恐らく歐米等の都市にては食料室、厨屋等の周圍に、何處にて必ず棲息し、其の交通の頻繁なる爲ならんが、百哩も千哩も御互に移殖せられて、御嫁に行つたり、貫つたり、婿に行つたりして、甚だしきは外國に澤山親戚を殘し、世界的繁殖をなし居る譯なるが、常に温かきストーブの後ろなどに生活する爲、生殖期なども極りなく、都合により一年二回も三回も子を持つことあり。其代り一匹が一匹づゝにして、其

卵は比較的大きく、四五分の親虫が一分幅に一分半位の長さあるキチン質の矩形状の袋子を産むなり。而も産放しに非らずして、自分の臀部に長く附着して幼虫の發生するまで離さず。其は此虫の先天的愛情の細かなる點を現し居るならんか、別ちがたけれ共、兎に角群生する虫丈ありて、中々社會組織の複雑なること、想像するに餘りあり。恐らく彼等の社會には彼等の文明の建設せられ居ることは事實なる如し。別段害はなきも、食物等に依り不潔なれば、極力盡滅を計るなるが、中々絶し盡されざるなり。主に熱湯をかけ驅除するも、巧みに生存して、益々繁殖を續け續くなり。彼等が熱湯を浴びて半死半生になれるもの、幸に取られたづけられずして放置されある場合など、一時間程経ちたる頃、又々ぞろぞろ彼等の殘黨共、數多出で來り、恰も蟻の運搬する如く、一匹づゝ負

傷者をいたわりつゝ、安全地帯に運搬し行くを見る。而して如何に處理するならんかと思へば、中々至れり盡せりにて、老幼數多集まる中にて一番大きな、且物知りらしき、醫師ともいふべき格の奴、他の見舞に集へるものごもを押別けて負傷者の手當を仕初むるなり。先づすゝと觸角にて觸れ試み、漸くにして重要なる患部を見出せる者の如く、其なやめる邊りを口より分泌せる唾液様の液を塗りまはり居る中、不思議にも其虫は蘇生して、跛引きゝゝ自分の室とも思しき邊りに這ひつゝ、隠れ行けり。

虫の個人教養

幼虫が袋の中にて生長次第、脹りきつたる袋に緩味が出来てべかゝする如くなり、最早大丈夫になれる頃、母体より離されて床下や棚の上等にてごろゝびくゝして居たるもの、頓て袋の端を切り開きて、廣く

明るき未だ見たこともなき光明の世界に出で来るなり。而して其後本能によりて、母虫を見出し得るか、又は母が我子を見別け得るならんかは問題なるも、恐らくかゝる複雑なる本能の働きはなく、畜社會の一員として、一般的道德の元に平等に棲息し、發達して行き、共産的社會の立派なる一員として遂に親となり、老者となり、斯くて彼等同族は繁榮し行くものの如し。哺乳動物の如きものに有りては、概ね自生するに時々食物の不足、及び取得の困難を感じ、順つて慾望が鄙しく表はれて、同時に産れたるものも、其強弱によりて非常に懸隔を生じ易きに反し、虫類にありては比較的自分を養ふに容易なる爲、大抵自然に發生したる同季生の虫はほゞ平等に發達し、敢て不同を見ざるものなり。歐米の共産主義者の如きは、他の動物より是等共生する虫類を理想とすべきならん。

蜂や蟻の春より秋にかけて、致々として稼ぎ溜のたる粒々辛苦の結果を、寒き冬の日に楽しく味はつて一社會の中に争もなく、喧嘩もなく、和氣緩々たる中に、又來る春を迎えて、盛夏の苦痛に不平も云はず、ぐるぐる同一のことを滑らかに繰り返し行くなり。然し彼等も年代と共に開化の程度を加へ行き決して停滯したるものならざるなり。

虫の盜賊

血を盜食する虫の中、南京虫は日本固有の物ならざるも、何時の頃にか移殖せられて、船付場等海外貨物の集散都市には至る所發生し、歐米にては内地至る所巢喰ひて人類の幸福を容赦なく奪ひ居るが、流石の白人も蚊や蚤を退治するよりは困難を感じるものの如し。硫酸瓦斯、水蒸氣等、色々方法を講じて、彼等の巢窟を襲ひ、全滅を計るも、中々微細な

る壁間、及び板の空隙等に隠れて、巧みに生存し、夜なよな人類を侵すものなり。馴れたる人は餘り感ぜざるも、馴れざる人には意外に苦痛なるものにて、蚤や蚊の類にてはなく、殆ど全身かぶれ上る位なり。何故馴れたる人には毒がきかぬや、と云ふに多分馴れたる人は彼等の侵すまゝに、無頓着に眠り居る故、血に飽きたる彼等は裕々として立去るに反し、不馴れのものにありては其刺戟を知覺するや否や、知覺に堪へずして、直に彼等の安寧を奪ふ故に、彼等も仰天し、周章して逃げ出すなり。其の逃げ出す時に、毒素を体内に残し去る故、其局部に堪へ難き痛痒を感せしむるものなり。此苦痛を避る爲に、不馴れのもの是非常に苦心するものにて、多く是等の人より細かなる觀察を聞き得るなり。四壁より離れて、四足によりて支へられたる寢台へ、何處より匍匐し來るならんか、

四足より傳はり來るものならんか、勿論蒲團に付く性質のものにてもなく、四壁に巢喰ひ居りて、人間の寢静まりし後ぞろ／＼やつて來るものなれば、誰しも第一の防禦は四足に澤山インセクトパウダーでも散布し置くも、矢張り同一の結果にて、原因は他にあり。よく／＼注意し見れば彼等は壁より天井に傳はり、人間の眞上よりぼとつと落ち來るものなれば、駄目な筈なり。如何にして此少さき虫が此離れ技を演ずるならんか、一寸不可思議に堪へざるなり。然れ共矢張視線より來れる母精の知覺判斷にして、彼等の目には長く寢て居る人間がちやんと寫り居るなり。而して人間の磁氣に對する不可思議なる連絡を有するものなり。

同じく視覺の働き

蚤と虱とは我國至る所に發生して殆んど通常のここの如く思ひ、別に新

しき話柄とする者もなし、只醫師、學者、が微菌を傳播する憂を叫び、或は當路者が疊は彼等の繁殖を自由ならしむる大欠點あり、とし清潔法執行、或は疊改造を絶叫する位にて、別段動物學上珍らしきものにてもなく、適々好事家の顯微鏡下に照らされし、恐ろしき毛脛や頭部の話を、今更の如に物珍らし氣に引出せる位が關の山なれど、此平凡なる害虫を今一度引出して觀察を試みんとす。夜氣静まつて寢息の微かに振えて居る疊の上に、のそく／＼匍ひ集まりて、何時か夜着、寢衣等の中に巧に侵入し來る。最も宵の中より忍び込み居る奴もあらんが、大抵は寢息の定まりて後、仕事に取りかゝる、畢境虫の御盜賊様にて、彼等の本能の不可思議なることは諸子の熟知する所の如し、朝日の障子に映じて長閑なる寢間の邊り、血に飽きて身動きも出來ぬ蚤の徐行するを見ることあ

り。餘りの横暴さに容赦の餘地なく、直様復讐に着手すれば、命冥加なる奴にて、つと布の縫目などに頭丈つき入れて平然たるあり。彼等に取りては畢生の忍術なるべけんも笑止なり。世に云ふ頭隠して尻隠さずにて、實驗としては餘りに陳腐なり。然れども之が畢竟虫の本能の大部分は視線より入り來る好箇の實例を吾人に示す者にて、蚤に於て最も明白なるを記憶すべきなり。

虫の千里眼

桑に生ずる或る虫は、親虫に因りて桑の甘皮に産み付けられ、其幼虫の間は皮間に養分を取り成長するものあり。其れに因れる桑の害も一方ならぬとのことなり。最も日本は歐州の如く、桑を喬木とすることなく、年々枝を伐採する習慣にありては、さして大害を受くると云ふ程のこと

もなからんが、中々其途に當るものに取りては大敵なりとか、然し不思議に是等の幼虫を常食とする蜂の一種あり、終日桑園に働きて人類に幸する者も有り。此蜂は所謂虫の千里眼とも云ふ可き者にて、害虫が桑の皮下に潛在するを、外部より探索して、決して見誤らざる事、殆ど百發百中とも云ふ可し、其虫を見出すや、必ず先づ穎利なる顎齒を持ちて樹皮を只一噛みにかみ切り、白色の幼虫を難なく捕獲し、一瞬にして何處にか運び去るなり。

如何にして此蜂の本能が皮下の害虫を見出し得るならんか、を考ふるに人知を以て研究し見るも、害虫の潜伏し居る箇所は外面何等の異状もなく、表皮の色すら變化し居らざるに、此蜂は巧に探し出し、少しの困難をも見出し難し兎に角面白き本能の働きて、其は透視力に因るべきか。

直覺の作用なるか、幾多の學者間にも異論を見る可き事ならんが、余は敢て視覺に因れる母精の知覺として斷定を下して憚らざるなり。

斯く網膜上の刺戟に因れる本能の働きは、母精の他の方法によりて受くる刺戟の中、最大なるものなれば、本能の研究も視線より來れる刺戟に伴ふ昆虫の動作を研究すれば足れり、然れども網膜上の刺戟によれる母精の教示なる者は、前述の如く幼虫の發達に共ふて昂進するものなり、若し其刺戟によれる本能の知覺が直に幼虫の知覺なりせば、母精の記憶全部が、幼虫の記憶にして、卵殻を出で、直ちに生殖、上簇等に至るまで、豫知し得べくんも、實は然らず、母精の教示と仔虫の体育とは比例して、恰も各細胞の發育に連れて、其原形質の有する力の合成力も増大すると做せし論者に一致するなり、母精は概して靜止的にして彼の眠むた氣なる老婆の、愛孫の

守を爲す光影にも似て、愛孫の執拗なる出問に對して、眠むた氣に、教示するを見ん。且ついたいけなる愛孫が老婆の透を見て逃走を企つるか、或は過ちて床上に倒れんとするや、不可思議に老婆の一閃的敏活なる救護を見るならん。彼の母精の幼虫に於けるも、畢竟斯くの如くにして、理性的後天的なりとするを、等しく此愛孫の出問に過ぎずして、其解結は老母の教示に待たざるべからず。而て幼虫の理性は常に母精の教示なる事は眞理なり。

其出問の口に寄らずして、微妙なる物理的方法に因る者にして、人類の腦皮層の發育は其出問の程度を示す如く、昆虫にありても視神經細胞の發育は母精に與ふる刺戟の多寡を生じ、成虫に至るに順ひて母精に與ふる刺戟も繁雜となり、不休に活躍せしむるに至るものなり。

昆虫の成熟するに至り、本能も漸く不可思議、且微妙なるに至る事は、視覺の機能の發達する如く、各神經系統に於ける機能も完成し、外面神經の知覺は直ちに母精の衝動的教示を來たし、熱暑に對しては發汗作用に等しきあり、過寒には週邊の血脈の狹窄により、溫熱の發散を制限するあり、或は普通溫熱に對しては、冷却作用に反して、溫熱を吸収し、殆ど溫血動物の如き溫度を貯藏することあり。各必然的生活の要件に適するものなり。

今溫度に對する昆虫の知覺を検せんに、假に大蜘蛛の裕々として活步する有る時、試みに火箸或は鐵片を熱したる者と、其冷たき者とを用意し置き、先づ冷たき鐵片をして其脚部に近づけしむべし。蜘蛛は只其視覺より來れる母精の刺戟に因りてのみ、警戒するを見るも、敢て周章する態なし。

其脚部に接觸するに至り、即ち迫害の危急なるを知りて、躍然として飛び除くを見ん、而して幾回試むるも同一結果を見るならん。然るに熱したる者を取りて、其脚部に近づくるに、冷たき者に於ける、平然として警戒するのみなるに反し、其鐵片に近き一肢或は二肢を遠ざけんとして、腹部に抱くを見る。幾回試むるも、常に同一の結果を見るならん。即ち温度の知覺は、其接觸に先だちて知覺することを知り、且つ温熱を避忌するの情を示すを見るならん。

斯く虫に置きても、他動物と等しく本能は常に光線と等しく熱を必要とするも、亦一面に置きて熱を避忌する性有る事、惟に此例に於けるのみならず。生物の太陽熱に對する、防備的現象は体美に於ける色素の研究ともなる者なり。

然しながら昆虫よく温度に對し敏なる知覺を有するとは云へ、直ちに四季に對する本能の働きを以て、温度の知覺ならんと云ふは、速斷なる點なきに非らざる者の如し、極寒に堪へたる卵の孵化する如き、蠶兒の眠りの如き、或は冬季に對する、防寒的本能の營の如き、温度の知覺以外目より入れる母精の判斷、及び不可思議なる時間的本能の觀念の著しきを知る。

但し本能の時間的觀念に對しては、余は之れを以て斯く推斷せんと試みつゝあるなり。先づ卵殻の孵化する時を考ふるに、成虫の神経系の所在により、其主腦的母精の所在を知り、腹方部稍尾端に近く、或は肢部に、殘餘の精（假に第二の母精）の所在を知るも、卵に有りては其親虫に於ける、第二の精が各一箇の卵に對し、各一箇づゝ、恰も佛教信者の所謂再生せしかの如き狀に態於て、或は再生と同一なりと見るべき現象に於きて、卵に

附着し産出せられ、卵細胞の分裂生殖を助くる作用をなす者にして、恰も卵に於ける母精は、卵殻を包むにも似て、常に卵細胞の繁殖を助くる作用の本因とも見るべく、熱と光線を知覚する爲、外氣に接觸する如き状態にあると想像すべきなり。然して比母精が、如何なる作用をなすべきかを考へんに、精は總べての生物を通じて、生殖後、死季に入れる季間を除きては、比較的静止的の性質を負ひ、且つ熱に飛躍し、冷氣に對して縮靜する性質を有する者にして、卵の成長は温熱に觸れて發達し、冷却して静止するものなり。此場合に於て、時間的觀念を、卵の發育に要すべき熱の總和を集得し得る時間を意味する者と見るべく、本能の時間的知覺は、實は時間的知覺に非らずして、卵細胞の發育に順ひ母精に對する反應的知覺の作用にては非らざるかと思意すのものなり。

其他睡眠季、變体季、等を知れるは其れに必要な各細胞の完成する爲、必要な熱の總量を得るに要する時間にして、寧ろ余は昆虫の本能より來れる諸問題を、網膜上及び週邊神經の刺戟によれる母精の知覺命令とし、他に不可解なる神秘の存せざることを云はんとするものなり。再び視覺より來れる母精の判斷なるものを述べんに、秋の庭に淋しくぶら下り居る蓑虫も、蛹となれる蝶も、皆月の世より來れる徳神の作用にてもなく、又秋の女神の恵にてもなく、只彼等の少なき視線によりて、修得したる憐れなる虫の母精が、天地六合に意義を留めんとする畢生の技能なるなり。而して彼等は如何にして自然の音れを知るか、視線によりて知得するとは如何なることならんか問はゞ、曰く「桐の一葉の音するなり」にて、人類の知能を以てするも尙木の葉の色付きたるを見、一葉の落下するを知

りて、目に視ぬ秋を知るに非らずや、昆虫も等しく、一葉の黄ばむを知りて冬に備ふるものなること、寧ろ愍然たるものならずや。本能の不可思議は、大部分昆虫の官能を通じて働く母精の力なれども、時には幼虫の官能の反應ならずして、母精の直覺なる不可思議なる作用あり。(次章に説明す)

又人類の心理に歸因すべき迷信により、通常昆虫の本能なりとなせし者等あり。然し乍ら一見不可思議なりと思せられたるものも、多くは幼虫の官能の刺戟によるもの多きは縷々細説せし所なるが、最も普通なる一例によりて、以上の如き本能に間はるる差異を示さんに、彼の蜜蜂の如き、蜜を遠距離に求め、或は蜂の蠟を運ぶ如き、普通吾人は、本能の直覺により蜜を求め、或は蠟の所在を直覺的に豫知するものとし、甚だしきは禪僧の

透視の如き作用ならんとし、蜜の野や、食餌の里が、自然に無我なる彼等の本能に寫出せらるゝならん、かと思はるゝも、實は皆彼等の視線より入り來れる刺戟によれる母精の判断と氣臆にして、平常彼等が飛び去り、飛び歸り、營々として忙はしき中に、何は何處、何は何邊、等恰も地理學者の如く、正確に彼等の活動地圖に精通する者にて、一朝一夕にして彼等の生の安きを、得るものならざる者にして、何等不可思議なる本能とする理由存せざるなり。

其他總て昆虫の無性に對する本能は、視覺による者なる事を氣臆すべきなり。蜂は虫類の中最も遠距離に活躍し、生に對する氣分の殊に充實したる風あり。視覺の大なるは、目の發達に徴するも明かなり。今試みに、蜂の無性に對する本能の直覺を考ふるに、春の頃、頑丈に作られたる彼等の

城壁に、愛らしき幼虫の籠れる時、親蜂の殊の外忙はし氣に、行きつ戻りつ、哺育に餘念なきを見ん、又往々其守備の任にある蜂の手勢少なきに乘じて、兒童群の來襲に遭ふことあり。苦戦惡鬪衆寡敵せず、遂に敗亡し、彼等年來の企圖一朝にして空しくなり、兒童群の惡々しき凱歌の許に、無残や、彼等の幼虫は城諸共、何處にか運び去られ、無念やる方なく、兒童の巨魁を追つて打死する者もあるならん。凡そ大活劇は哀愁によりて完成せらるゝものにして、折角幼虫の土産にと最も美味なる、且香ばしき、新鮮なる蜜を口に含みて、いそぐとして歸り見れば、殺風浙瀝として憐れ最愛の幼兒はあらず、虫僕は空しく屍を横へて、城壁は影だもなく、枯木鳥聲の觀轉た愴然たる親蜂の群、愁々として恨み數日に渡るを見る。即ち蜂の本能は、視覺によるものなることを會得するならん。

若し其本能にして、視覺以上の能力ありとせば兒童軍の大半を走らしむること容易なりしならん。其他に就て見るに、熊蜂が巢を門に造れば世は乱れ、蜂の巢が低くければ、年に暴風多く、蟻の巢の高所に選ばれたるは大水の徴なり、とか様々不可思議なるは皆後者に屬するものなり。

磁氣

物理學にあれば、宇宙の物体は一として引力の法則に支配せられざるはなく、太陽の大より分子の小に至るまで、此不可思議なる、力の作用に背戻する者なし。

引力の生物の生存に重大なる關係を有するは言を待たず、日常物体の安定なる、水の不盡なる、空氣の輕微に至るまで、よく引力の作用によりてのみ我生物界は存在し得るものなり。生物の肉体の如きは、既に此引力の恩恵によらずして夢想だもし得べきものに非らず。況んや生物の意義をや。此不可思議なる現象は斯く絶大無邊にして、微々たる人類の規矩し得るものに非らざるとは云へ、「ニュートン」の椅子に初まり、引力に對する人類の知識の進歩も亦少なからず。

通常吾人に示されつゝ有る現象の重力、附着力、等の外、幾多未發見の方面に、引力の異なりたる表出なしとせず。原子間の結合、電子の牽引、反撥の如きも、或は引力の表現とも見る可く、人靈、生物の精、等に對する引力の反應や如何、其外對引力の努力が、文明を意味するなど、種々研究

せるに値ひする、資料も亦少なじとせず。但し虫類の精を、一種の物質の如く想像せんとする余も、未だ靈、或は精に重力ありとも思意せられず。或は原子と等しく、極微にして、重量なきに等しきものなりや否や、をも疑ふものなり。然りと雖、彼等間には、殆ど物質相互間に相牽引する、不可知、不可則なる力の作用するある如く、昆虫の精にも、互ふ作用する不可思議なる力の存在する有り、名づけて生物磁氣と稱す。此磁氣なるものは、恰も兒童の綱引の如きものにして、其意志によりて強弱あるは、無性の一定不變なると少なからず趣を異にせり。

今此磁氣なるものを考究せんに、余は直ちに定義を下して、狹義に於て、「生物磁氣とは精の相互的反應なり。」とす。

普通に云ふ生物磁氣とは、單に生物相互間に於ける惡意を意味する如く、

善意に於ける作用に比して、前者の場合のみ著しきは、不可思議なる現象にして、之を見るも生の半面は到底殺伐なるが如し。
 生物の磁氣は精の知覺作用なれば、敢て生物自身の間識する場合のみに限らず、生物の一方の何れかの知覺に初まるか、或は双方不知覺の間に作用することあり、或は單に一個對一個のみならず、一個對數個なる事有り、數個對數個なる有り。

生物磁氣は上述の如き恐ろしき觀念のみに限らず、昆虫に有りては、初秋配偶の淘汰の繁く行はるゝ場合等、美しき磁氣の作用有るを知るならん。
 普通相識の場合に説明するまでもなき事なれども、一方のみ知覺する場合、例へば、無心に鳴く雄虫を遠く慕ひよる雌虫の如き、其聲により方位を知りつゝ、雄虫の優に温和なる姿を想像する雌虫の本能の作用は、此場合に

適す可き一種の磁氣の働きとも見得べく、其他生物相互共、不知覺の中に作用する磁氣の如き、其例多かる可きも、就中重大なる問題なるは、精の回收なりとする。廣漠たる荒野の末に死殻を横へたる去年の老虫は、吾人が想像する如く、若草の頃精に蘇生して、自由の樂を享るならんと思ふならんも、實際吾人が考ふる如く、精は自由の樂土を他界に有するものにてもなく、さりとて叢裏に悲しく生存するものにてもなく、何か異なりたる社會を構成するならんことは、何人も想像する所ならん。其は即ち彼等が精となりて、直ちに昇天し、神の膝下に不朽の光榮を享樂するとするも、先づ吾人の知る範圍内に於ては、比較的長き時代を通じて地球の表面に彷徨するものにして、其如何なる状態に地上に存在するや、は即ち教師が師範學校を出で、教鞭を取り、或は乳臭の兒女が、頓て母たらん如く、昆虫

に生を終りたる精は、即ち昆虫の神、即ち母精の爲に創生せられ、あらゆる無性に對して生の幸福を感じたらん如く、彼等も亦母精となりて、新生を創出す可き、重大なる任務を有するものなれば、彼等の最後の何處、或は如何なる状態に於けるも、出來得る限り速かに、本然の位置に到達せんことは、彼等の死後の觀念にして、死の哀愁も、靈界の淋しさも、觀ずれば皆本來に歸せしむ可く、不可思議なる力の作用するものとも思爲す可し。然し乍ら此不可思議なる力こそ、在天の慈父によりて與へられたる知覺に非らずして、實に此不可思議なる生物磁氣の力によることなり。其如何にして磁氣は作用し、如何にして千里の野末に果てたる昆虫の精、或は大會の虫籠の中に横死したる昆虫の精は、再び幼虫の媒育の天分を完ふし得るならんと云ふに、成虫の機能漸く熟し、母精の知覺判然するに至り、何

時か不可思議なる磁氣も増大となり、或る距離に於きて、是等の淋しき半睡眠的孤獨なる精に作用し、集取するに至る。昆虫に取りては、東京の真中は人類に於ける、亞弗利加の内地よりも淋しく、且はかなき所にして、實に浮ぶせもなき奈洛の地獄にも比す可き恐ろしき所なりとは、昆虫ならぬ人の思ひもよらぬ事なり。彼の愛玩家が心盡したる、清洒なる如何にも住心ちよき、虫籠のいと冷し氣に、水打ち清められたる夏の庭に面じて置かれたる時、何人も虫の眼加さ、幸福さを嘆せざるものなからん。去りながら、自由を失ひ徒然やる方なき虫に取りては夏の夜の短かさに鳴き餘したる曉の聲の、そぞろに餘韻を止むれば、憐れ心なき人の心にも悲しき秋を思はするならん。別けて虫に生を得て、知り初めし友愛や、初戀の情、未だ温まらざるに、無殘や虫

賣の手に捕はれて、幽囚の身となり、二日三日は絶食までして、寧ろ屈辱に生きながらへんより、死して自由の叢裏に歸らんと思ふ心のありやなしや。少なき彼等にも、意外に強き恐怖も不満も、なづまぬ彼等の様子に知らるゝに非らずや。頓て可憐なる彼等も、一縷のよもやに引かされて、何時か都會の街路に洒らさるゝ頃には悲しき心を込めし御里なまりの鄙歌にやるせなき心を事よせつ、都人の歡心を迎ふるに至るならんが、彼等の多くは精となりて遂に、本然に立至る事なく、生微となり盡し、再び不定の神慮にゆだねる運命なるを知らば、此少なき昆虫一匹の如何に憐れに、且其生の如何に神秘なるかを思ふ可し。

生物磁氣の惡意の場合のみ現著なるは、一見奇異なる如きも、亦冷靜なる觀察を廻らせば、寧ろ當然に屬すべし。

凡そ他の動物のみに限らず、昆虫に有りても、生に恐るべき不安を感じる如きなるは、人類の太古に於て、生命の顧みられざりし時代に遡りて想像せんは、此場合最も適切なるものならん。晝間は食虫鳥の劫やかすあり、夜に入りて尙蝙蝠の敵有り、常に生に對し少なからざる不安有るのみならず、彼等相互間にも、互ひに生食を事とするありて、競争の激烈なる憂ひに至りては、流石に人類の悲史の如何なる頁をたどるも比すべき者有るなし。蓋し彼等の磁氣の惡意に於てのみ現著なる可き唯一の理なり。彼等の如何なる種類なるを問はず、頗る機敏にして、少しも人類の愚鈍なるものに見る如き氣合の不充實なるもの有るを見ず。即ち彼等の文明が彼等の体美に畫かれたる如く、保護と警戒の巧みなる、且眞摯なるを見るも、亦興味有る問題なりとす。

今試みに虫籠の中に、螳螂と蟬とを同時に入れ、兩者の磁氣の如何に働くかを觀測せんに、蟬も螳螂も、少なからざる磁力の反應を認むるならん。此場合に於ける、兩虫の心理状態を考察せんに、顯かに螳螂の腦裏に潜める者は、實物大の一匹の蟬以外、何物をも存せざるべく、恐怖に警戒する蟬の心理は、勿論大なる螳螂の目と、氣味惡るき斧の存在することは、何人も否定せざる所なり。兩虫を初めて會見せしめし一瞬に於て、蟬の本能が直に螳螂を以て忌む可き強敵なるを教示せるは、其經驗より來れるものに非らずして、螳螂の巨大なる猛惡なる眼光と、鋭き二個の斧より推測せし母精の理性と認むべきものにて、彼れには其等の斧の用途と、其目なざしとにより、既に螳螂全体の性向を讀破せしものなり。従つて自己の防備的武器の欠乏と、平常唯一の手段とせし、飛翔術も、此場合不要に歸し居

る憐れなる境遇をも知覺し居るものにて、意外に複雑なる情緒の往復することは、想像するに難からざるなり。螳螂にありては現時の場合、既に蟬の死地にあるを知り、敢て迫らざる威風は、惡む可き中にも、亦一點强者の心ち善き氣分を察せざる可からず。然れ共就中注意す可きは、蟬の態度に比較的萎微の少なきこと、到底獅子に睨られたる小牛の如からず、又蛇に追はれたる鼠の如からざる事なりとす。され共蟬に恐怖なき謂ひに非らず、其恐怖なるものは、即ち兩虫の磁氣の反應の結果にして、又磁氣の差なりとす。其外蜘蛛と蠅、蟻と病虫、どの如き幾多通常吾人の目撃する出來事に於きて、等しく恐ろしき生物磁氣の現象を考察す可し。蜘蛛と蠅の如きは、稍もすれば蠅の方反つて挑戦的なることあり、強ち磁

氣の差と云ふも、亦其境遇の如何によりて異なるを見るものなり。若し蠅をして蟬の場合の如く、彼れの唯一の手段をして空しからしめば、即ち蜘蛛の巢に既に捕はれたる後に於ける、蠅の態度を檢せんに、周章然として糸に挑むを見ん。此場合に於ける蠅の心理状態は、恐らく蜘蛛てふ強敵の毒手の急迫せし恐る可き出来事を想像しつゝ、遂に蠅の腦裏は巨大なる蜘蛛の頭部に以て掩はれ居ること、宛然見る如くなる可し。病虫の蟻に付けられたる場合にありては、例へば、芋虫の如き肥大なる虫の、偶然蟻の道路に横はりて病める時等、病勢の難みに巨軀を移しかねて、遂に蟻軍の毒手を脱すること能はざるに至れる場合、此芋虫の心中は將に察するに餘り有り、恐らく彼の眼底には、死に至る迄、執拗なる蟻軍の像映に、恐怖の色を漂はせたる、悽愴たる光影ならざるべからず。然し其爲

樂を得るに至れるまでの心理は、けなげにも亦憐れなるものなり。彼の自己に比して遙かに少なる蟻軍の群の恐ろしき執着は、彼れに取りては、確かに煩腦の、犬にも似て、死力のあらん限り、否餘生のあらん限り、今生の盡きせん限り、付きまどわりて、悲哀慘憺例へん方なし。然し其強者なるもの、即ち目して常に強者の立場に於かれたる虫の悲哀と恐怖とに就而見るに、吾等人類の社會にありても、絶体に強者なるものなく、従つて絶体に恐怖なきものなく、又苦痛なき能はざる如く、昆虫の社會に於ても、亦絶体の強者なく、恐怖と苦痛は等しく生あるものを通有性にして、無數の昆虫界にありては、彼の三縮的顯象多々あれ共多くは「をんぼう」役たる蟻軍の來襲によりて、猛者の傳記は終結を告ぐるものなり。

萬一蟻軍の食たらずして了るも、生物には均しく病魔の襲ふありて、苦痛の絶体なる法則に洩るゝものなきは、大に吾人をして、生に對する其矛盾の大なるを鳴らさざるべからざることなり。但し斯くの如く不偏にして、一定なる出來事には、不變の眞理の存在すること、又想像に難からざる所なり。

悪意の場合に於ける磁力の働ける結果は、多く恐怖として出現するものなるも、往々勢力の均衡によりて、始めて起るべき争闘あり、即ち同種間に於ける争闘の如き、其雌虫の愛を龍斷せんとしてあつばれば好男子を氣取れる兩虫の花々しき決闘の如き、或は子虫の争奪に於ける正義の蟻軍戦の如き、其個々たる團體たるもの別なく、大方其勢の均衡したるものによりては、敢て恐怖と稱すべきものなし。

余は嘗て赤蟻の争闘を見しに、丁度眞夏の頃なりしが、田舎道に沿ひて夥だしき蟻軍の進行するあり、俗に蟻の御彼岸参りとして、往々數町の長きに渡ることありとか聞きつるに、實際其蟻の行列も、一町位の長きに渡り、宛然昔日往來繁かりし東海道の雑踏にも似たらん如く、行き更ふ蟻の忙はし氣にもあり、又長閑氣にもあり、寄りつ集ひつ、又追ひ越しつ、様々なるに、餘念なく彼等の行先と、彼等の目的物とを探知す可く御苦勞にも、畑に這いつたり、草の根を別けたりして、辛うじて彼等の目的地に達せしが、別段大獲物を運搬せんとはなく、同種間の争闘ありし如く、噛み殺ろされたる者、踏みにじられたる者等、慘然たる光景にて、敵か味方か、切々として屍を運搬する最中なりけり。別段大戦争と思はるゝ程にてもなければ、其死傷の夥だしきより察するに、此大軍に對向する敵軍の、那邊かに

存在せしものならん。且此等の勇士の心事は勇敢にして、死を恐れざるこ
 とよりしても、到底恐怖の存在せし様もなし。尤も蟻は虫の内、最も氣の
 強き虫にして、常に強敵を相手となし居るものなれば、此場合好適例なら
 ざるも、同種間に於ける悪意ある磁氣は能く均衡せしものにして、同種の
 みならず、異種間に於ける悪意ある磁氣も、其均衡したる場合に於て、慘
 憺たる争闘となりて出現する例少なからず。
 穴蜂と大理蜘蛛等の雄々しき光景を間々呈することあるなぞ、同種間に於
 ける悪意ある磁氣が、激烈なる争闘とならずして、徐々たる勢力の對向と
 なる有り、彼の蜜蜂が時に、副女王を産出すること有り、此副女王は比較
 的容姿も醜惡にして、氣品も劣り、到底其聲望に於て對持す可きものなけ
 れど、兎に角容姿の調ひて、漸く艶ならんとする頃には、此女王に媚を呈

するものもあり、他に野心を逞しうするものも出來、醜類何時か相求むる
 ありて、潜かに隠謀を廻らすに至る、然し天網何如にか洩すあらん、正統
 の護神の怒る所となりて、遂に分離するに至る、之れ即ち団体と団体、と
 の磁氣の作用にして、且急激ならざるは、反て高等なる心理を表出するも
 のにして、何々騒動と題命す可き複雑隱微なる出來事たらすんば非らず。
 団体が個体に及ぼす磁氣に就て見るに、群生する虫の磁氣の統一は多々不
 可思議なる現象を示すことあるも、就中吾人をして心膽を悪からしむるも
 のは、病蛇に寄る蟻軍の磁氣ならざる可からず。歐米等にも恐ろしき生
 物の繪畫の中に數へられつゝある、「蟻軍襲蛇」の寫生を見しことありし
 が、鱗の色あせたる尺餘の老蛇が、路傍の土にまみれつゝ、轉輾苦惱する
 如き圖を珍らしき事と思ひ、寄近りて密に注視すれば、砂泥の如く見えた

るは宜なるかな、無数の蟻の軍が續々として來襲する所にして、老蛇の体軀に付着したるは、蟻が蛇の肉を齧穿して腹と云はず、咽喉と云はず、將た口より目より、侵入する恐ろしき光景にて、苦痛に堪へかねたる蛇の末期の哀愁と、執念深き蟻軍の恐ろしき磁氣の統一したる、不思議に氣味悪しき氣分を書き出したるものにて、何時も目を閉づる時、目前に現はる位入神の作なりし如く察せられたり。

其他蚊、浮塵子等の交尾期に於て柱となり、玉となり、隠々として終日浮遊するを見る時、統一したる少さき虫の磁氣が、何となく吾人にも感應するかの如く思意せられて、思はず足を止むることもあるものなり。

斯く生物磁氣を精の相互的反應なりとの見地より論ずる時は、又人生問題にも適應すべく、本篇にては殊に人類と昆虫との磁氣の作用を研究すべき

こと、亦敢て徒勞に非らざるなり。

今少しく一例を擧げて其研究の一緒たらんとす。

或る日大蜘蛛の大なるもの、天井より壁を傳はり、悠々として徐行し居たるを見たり、何を喰つて生活するならんか、馬鹿に大きな奴にて、實に悪々しき程なり。俗に晝の蜘蛛は殺すな、夜の蜘蛛は親と見ても殺せと、云ひ傳はり居れども、其理由は解せず。されど兎に角退治やらんと思ひ邊りに有り合せし物指を持ちて身構へたるに、其れとは知る由もなき大蜘蛛殿相變らすのそく出で來れり。二尺下り、三尺下り、遂に疊に匍ひ降り、何方を先に漁らんか、右に行かんか、左に仕様かと暫くためらひ居たるを、今一打ちに打殺しくれんと思ひたれど、一寸場所が悪い様にて、何となく物指の先が壁に支へそうなりければ、差し扣へて居たるに、先も中々油斷を

せず、最早既に彼れは危険を嗅ぎ付けたるなり。否、嗅覺にてはなく、彼れの異様な眼底には、常に異なりたる人間の舉動がちらんと映じて居るなり。其視覺の刺戟によりて、母精は先の先から人間の呼吸まで、計らつて一寸の油断もなし。こちらは人間取物は善し、大蜘蛛一匹何かあらん。只一打ち、目に物見せんと、やにはに打降せば、何の事はなく、蜘蛛は何時の間にかびつよくと氣合をはづして、三尺も彼方に居たり。何糞と、やけのめつた打ちをして追ひかけしが、蜘蛛は既に影もなく障子の立付けの透間より、消ゆる如く逃げのびて五尺の男子將に顔色なし。虫類の生磁氣の感應は、殊に人間に對して敏く複雑なり。人を神と見るか鬼と見るか、何は兎もあれ、五尺の男子と蜘蛛一匹の仕合、寧ろ此結果の不合理なるに驚かざるを得ず。然し事實は既に事實にして、何か其間に於

ける眞理の存在も否定しがたき者なり。従つて是れが解釋を見出さざる可からず。然れ共赤裸々なる解釋は、寧ろ吾人に疑惑を興ふるのみにして、反て不利なれば、只畧して此場合に於ける現象を説明せんに、敵に平蜘蛛一匹と思ひしは單に皮相の見にして、敵は大蜘蛛と自己の心理的作用なり。我國にても昆虫に對する色々面白き怪談を聞く事あり。往々昔の人にては、識者の中には折角明るき世界を暗くする憂ひが有るかの如く思ひ、否定するものあり。又學術の進歩に連れ、多くは迷信の許に、一瞥だも價ひせざる者として、遂に其真相を穿つ者も無かりしが、近代に至つて、所謂迷信を嫌避したる文明は、眞の文明に非らず、眞の人生は、迷信なる語に一括して棄却したる部分を他にしては意義を生ぜざることを知り、愕然恐々として、神秘の考究に取入れる傾向あり。最早古人の憂ひも、杞憂に過

ぎず、畢竟迷信なる語に隠れたる總ての眞理を抱括融和したる一大新文明は他日建設せられんとす。

一日或る昆虫雜誌を見しに、或る村の富豪の子息がふとしたる事にて發狂し、最愛の妻を残して間近の溜池に身を投じて自殺を計りぬ。其れを救助せんとして、馳せ來れる近鄰の人も共に溺れ、三人一團となりて冷たく上りしとか、丁度其明る年の其頃なりける、妙齡の未亡人を、或る粹人ありて同じ村の等しく若き寡夫となれる男に嫁せしめ、目出度婚禮もすむ可かりし日のくれがた、浮蟻の群何處よりかより集まつて、婚禮の座席に入り來り、あわや團一團と群がり來り、果ては死虫の山を出現し、居合ふ人も此不吉なる出來事に心を寒ふしたりと有り。

又或る化物屋敷を、或る勇ましき若者が探検して見たりしに、天井裏に蜜

蜂の大古巢有り、幾千の蜜蜂が眞夜中に怪聲を放ちたりしなりとか、大に首肯す可きことなり。然れども一步勇を鼓して、人靈の指命が虫類に及ぼしたりとして怪事を怪事として考究して見たらんには如何。勿論奇を好む謂ひにてはなく、以上の如き例を意味する者にてもなく、只眞實怪とするにたる場合を意味するなり。或は過度期に於ける弊害は有らんも、敢て物好きに暗く考へざる可からざる程の必要もなく、迷信として黒めてしもう必要もなし。やがて吾人は何人も至るべき靈界、何人も化す可き靈、敢て肯定するも、否定するも、共に一考を要する者なりとす。大に人類の前途を美化し、少なくとも、死は一大人生の變達にして、否一大生物の變達にして、蛹が蝶に化したらん位に考へ、人類も昆虫と等しく死の點に於て變達發生を遂げて靈化し、常に靈長たる可き恩典に浴す可き者なり、と思

考す可きものなりとす。

人靈の昆虫の精に及ぼす力、即ち人間の磁力が昆虫に作用することは、事實に於て掩ふ可からず。釣竿に寄れる魚の如く、昆虫の捕捉が、人類に取りて多くの趣味を引起す場合に遭遇せば、必ず捕虫機の有る所必ず死虫有り、と吾人をして呼ばしめしならん。此推理に於て、常夜燈にして唯に寂寥たる田野に放置せられたる者よりも、熱誠なる番人の起床する番小屋に近く、或は趣味に集ふ人々の觀視の許に置くは、遙かに有功なる理由なれども、反て人士の間に反感或は懷疑を懐かんには、等しく遙かに不利を証す可く、現代人の心理にして間々執拗なるは、我が靈界が文明的、淡泊なる性質ならざる弊に有るためとして、由々しき根本的の人生問題なりとす。従つて人靈を云爲するも、亦重大問題たらざる可けんも、世界の趨勢の既

に其域を過ぎて、神人交合の文明に入れる時、一人我國のみ舊套を脱せずんば、其の過渡期に於ける弊害の小なるに比して、其は根本的絶滅的なるを思はゞ須らく靈界を思ふ事洒然として淡ならざる可からず、又浩然にして美ならざる可からず。其他蠶兒に對する飼養者との關係等、大に研究す可き事共多し、飼養人の休養、或は交代、解備等は必要と見る可きなり。以上の如くなるも、人靈が昆虫に及ぼせる磁氣を講究するは、本編の主目とする所に非らざれば、寧ろ冗長なりし如きも、昆虫の磁氣なる意味の説明として、人靈と昆虫との磁氣の現象を想像せんも、亦敢て不合理に非らざるなり。

従つて他の動物と昆虫との磁氣の關係を見るに、昆虫は鳶の飛影を見て雛を憂ふる親鷄の如く、恐怖を表出する事敏活ならず、且明白なる能はざる

も、蛙の磁氣に因りて引着られたる、少なき蝶の現象を思ひ起す事有り。或る日小溝の堤に咲ける黄色の草花、(多分こぼれ咲に咲ける南瓜の花なりしか、畑の南瓜は一月程前に取り盡くされし頃なりしが、如何にして咲けるか、遅れ咲きなりければ少く見えける一輪花)の真下に大蛙の無態なる奴、住居まゐけるが、少なき蝶一つ來りて花の露を吸はんとて此花に寄れり、今まで洒然として愚なるが如き蛙公、むつくり向きなほりて、黄花に寄らんとする少なき蝶を、御座んなれとばかり待ちかまへたり。其花は蛙の頭より一尺も上に有りしが、大方一睨みに睨み落すならんかと思ひしが、蛙公の磁力も左程巧妙には行かぬ者と見え、つと縮まりしと見し間に、花の上一二寸が程に有りたる獲物を目掛けて飛びかゝり、草の葉に白き腹を現はして落ち來れり。花はゆらくして留度なし。定めしの中せ

しかと思ひしが、蛙公目をくりくするのみにて、絶えて手苔なき模様なりき。果せるかな少なき以前の蝶は何時の間にか、向ふの花々にもつれて樂し氣に、何の恐怖も懸念もなき様なりき。扱て一日の糧にはづれて、さも遺憾なりし如く、蛙は白き咽喉部をびくく浪立たせ居たり。然し別段氣を轉じたらん如もなく、花の下に蹲居して、又來ん機會を伺ふ者の如し。余は註釋をして曰く、「蛙公にして常に斯くの如くんば、彼等の生は生物の中最も困難なる者ならん、到底今日の飢を癒やさん様もなし」と然し生物は生くる爲に生れ、生くる爲に與へらるゝ物なり彼も一回の失敗に生をはかなむ程愚物にてもなし、明日も亦洒然として生んとするは、何か生を安全ならしむ可き、確信の存する事ならん。蛙公の術數如何と見て有れば、黄色の花こそ彼れの唯一の目標にて、いつかな失望の色もなかりき、果し

て數分にして、以前の小蝶舞ひもごり來りて、以前の如く此花に寄らんとするなり。餘り大膽さに小蝶を愚かしく思ひけるが、良く考ふれば昆虫はかゝる危険は世の習ひにて、此危険を侵すことなくして生を得ること難き者なり。何の苦もなき浮れ蝶も、實に緊張したる一生懸命なる世渡りをなす者なるが、又一面より見れば輕侮と戲謔との通有性より來れる者なるかの如し。小蝶は平然として花に近かんとするなり。然し其見解に於て、幾多の解釋を許すならんも、小蝶は遂に蛙公の食餌たらずんば非らず。此南瓜の花は蛙の磁力圈内にして、小蝶のよれるは無意識なると、有意識なると、理由の存すると、存せざるとの別なく、此蝶は蛙公の磁力に感應したる者と斷定して可ならん。斯くの如く、他の生物も生食するものにおいて、磁力の圈内てふ恐ろし

き無形の網を設け居る事は、等しく承知する可き事なり。其他生食する虫類を見るに、肉食動物が一般に他の者に比して、性獐惡なるが如く、此種の虫類も大抵執猛なる者なり。螳螂の如く常に武装する虫、蟻の如く半生物を獵る者、蜘蛛の如く強健なる獲物を好んで常食とする者、皆複雑なる觀察を値ひする者にして、蟻の如きは將に醫師の如き知識と、道德とを有し、到底生命を全ふする事不可能なる病虫は、容捨なく彼等の巢に引入れて後々の料食に充つる者なり。螳螂は俗に螳螂の斧の諺の如く、常に合手の何たるかを辨せず、過敏に争鬪を挑む者なり。往々小學兒童の捧切等に、斧の刃を磨ぎ、目を怒らして、恐ろしき不氣味な性格を示すを見る。況んや其横死するや、腹中より尺に餘る百蛭を出して、日の終るまで蠢々として縫ひ絡はれる有様を見ても、吾人は何如に此種の

執拗なるかを、想像せしむるならん、彼の壁間に潜んで蠅を捕食する蜘蛛は、叢林に獵る獅子の如く、又沼澤に匍匐する鱒魚の如き者にして、一度生物を認めては、捕り喰つて自己が臟腑を満足せしめずんば止まざる性格を有し、彼等が他の虫類に比して、異なりたる精を有する事を物語る者なり。今此種の磁氣、即ち精の働きを考察するに、蠅捕蜘蛛は突然の場合を除きては、蠅の間近かに徐行して適當なる距離に至り、靜かに目的物の知覺を待ち居るなり、蠅は危険の近ける時、本能の知覺によりて、直ちに振向き、仔細に敵の動作を觀察せんとす。蜘蛛はしすましたりと爲し、公然施術に取かゝるなり。觸手を忙はしく振動して、蠅の精心を千々に毀たんとして、餘念なきを見るならん。恐ろしき虫の性向を想像すれば、色々有る者ならんが、就中不可思議なるは蝸なり。多く熱帶地方に棲存し、温帶地方にも

砂地多き地方には往々棲存する事有り。蛇蝎の如く忌むなぞ言ひ傳へて、古來より忌み嫌はる、だけ有りて、其の人畜を害する事間々有り。「アートピサリ」に細長き臀尾を付けたる如き形態を有し、大なる蜘蛛類に入る可き者にして、其尾端に恐ろしき毒液を持ち、人畜の足部等に押し付けられし場合、支那琉球等に於ては、よく死に目に會ふ如き人の出来るを視ると云ふ。此恐る可き、且忌む可き虫は常に砂中に隠れて味氣なき生活をなし居るも、彼等にも亦樂みも有り、戀も有る者にて、等しく生物として其部分を享有する者なり。彼等の戀は或は熱帶の日に焼けて、卵も煮えると云はるる、熱き砂原を通じて甘き情交をかはす者なり。然れども彼等の毒性は遂に詩をなさずして、雌蝸の受胎を完成するや否や、直様雌虫は雄虫に飛びかゝりて、其愛人然も胎兒の父親をむぎく食し終る者なり。西洋にて

は男性の献身的愛の代表として、蝸の見るも忌はしき畫を掲げ有るを見るも、寧ろ不祥なる如く思意せらるゝ者なり。此食雄の現象も、狂態にして、雄精の全部が交尾の際、雌の体部に移植せられて、急に雌体に置ける精の均衡を失したる爲、雌の性情に一大急變を及ぼしたる結果、狂乱して最愛なる夫を打ち喰ひたる者と見る可きなり。

生物磁氣とは以上によりて其概念を得たる感有るも、亦頗る捕捉し難く、其見解の如き、古來東西學者の多く試みたる所なるも、概して幼稚なるものの如し。

生物磁氣の現象多々有りとは云へ、放心と恐怖の二種最も顯著なりとす。此場合に云へる放心とは、磁力の作用する有りて、其目的物となれる生物の心理状態空虚となりて、何等の意識もなき形を云ふ。

恐怖とは心理學の所謂知、意、の縮少によりて情に對する判断を欠除せる場合を意味する者なりとす。昆虫に於ける場合は、頗る研究するに困難なれば、少しく廣義に渡り、放心と恐怖に就て研究の歩を進めんに、凡そ放心とは、上述の心理状態なるも、赤裸々なる研究に於ては、少しく吾人の得たる知識の上に理解を求むるを要す。即ち生物磁氣に於ける放心は、其恐怖の場合に於ける如く、理知の存在によりて生物其れ自身知覺を存する事なく、總て無我の中に置かれたる事は、放心に於ける主要件たらざる可からず、従つて其無我なる生物の心理状態を研究せんは、當然の目的なりとす。然れども實際に有りては、必ずしも明確に空虚なる心理状態に落ち入り、全く無我たる能はず、彼の蛙の磁氣に感染し、幾度となく危険區域を侵せる蝶の場合、或は青大蛇の前に行きつもごりつする廿日鼠の如き、皆

此放心の中に入る可き現象なるも彼等の心理状態も強ち全々空虚なる能はず、幾度ともなく蛙に追はれては去り、去りては来る、蝶の如きは、即ち花に酔える夢の如き樂しさか、さもなければ蜜に餓えたるやるせなき過ぎはひか、彼等の心事は常に斯く多忙なり。然れ共兎に角目前に迫まれる危険に對する知の判断もなく、遠く逃れ去る可き意志もなく、さりどて彼等の心事には、一點恐怖の影だも潜まざるは、即ち此危険物に對して、此生物は意識の空虚なる者にして、放心状態に有る者なりとす。

如何にして此蝶は此蛙の磁力圈内に於て放心状態に入りたるやを、知得せん爲に、先づ吾人は斯く斷定を得。多くの場合に、各自演譯的實証を求めて、全き了解を得ん事を期す。即ち放心とは恐怖の一種にして、一般的恐怖が、生物の意識に初まりて来るに反し、放心は無意識より来る恐怖なり

とす。然らば無意識より來れる恐怖とは何、曰く生物其れ自身の恐怖に非らずして其生物の神、即ち母精の直覺的恐怖にして、敢て生物の意識を持ち來さる者、且母精の萎縮によりて生物の磁氣の圈内に放心したる者なりとす。

斯くの如く一生物が他生物磁力に無意識の中に感染し、其圈内に於て放心したる場合に有りては、生物自身は無意識にして、母精が直覺的に恐怖を感じ、萎縮するにある物なれども、其母精の恐怖の結果は、又二種の區別を生ずる者とす。即ち磁氣の牽引によりて母精が吸収せられたる場合と、他生物の磁力の直覺によりて萎縮せる場合とす。然れども其は、兩磁力の差異の程度より來れる異なる結果とも見る可く、又感染力の多寡即ち精の恐怖の多寡にも原因する者にして、母精が磁氣に感染して吸引せられ、子

体を分離せられ、所謂「オフ」なる現象に置ける場合は、比較的昆虫界には少なく適々蚊の如き小虫が三四寸を隔て、蛙に吸込まるゝ場合等は顯かに母精の吸引に因れる結果にして、其他斯くの如き場合少なき者とす。然れ共其高等動物に有りては、比較的磁力の牽引により放心、或は失神の結果を來す事少なしとせず。其は心理状態の發達、複雑、過敏なると、比較的母精の活躍飛動的なるに原因し、且つ母精の恐怖等の如き消極的意味のみによらず、往々積極的の意味に於て子体より分離せられ、子体の放心、失神等を來し、遂に其を犠牲たらしむる事は、吾人々類に有りても未開の時代に於て、其實例を得る事易き如きも、現代に有りては只口碑によりて伺ふを得るのみとす。然れども現代に有りても、アフリカの内地の如き太古のまゝの面影を存する地に有りては、今尙其例なしとせず。彼の地の深林

荒野に住せる灰白蛇は、平常小山の如く蟠居し、或は巨岩の如く横はり、白晝遠く人馬を呼んで常食とすると云ふ。尙其他の爬虫類の恐ろしき磁氣の人類に及ぼせる口碑は、我國にも夥しと云ふ。其は爬虫類をして最も執念深き動物とせる因襲的想像より産出せし者多しとするも、要するに爬虫類の如き、元始的動物に有りては、嘗て人類を常食とし、吾人の祖先の生を脅かせし遠き因縁とも見る可く、強ち小兒だましの物語りとも云ひ難き者有るを見るなり。

此意義に於て、人類の放心を研究すれば種々様々なる場合出來するならんが、善意の場合に於ても、放心を研究せんに、彼の座禪によりて無我の域に入らんとする輩の如き、或は哲學者の隨意放心の如き、或は一般的思索家、小説家等の冥想の如き、皆此放心の善意的應用と見るべし。禪に

入りて如來に接せんとし、筆を置いて入神の戲を畫する等、皆人爲的放心によりて、より大なる磁力に接し、所謂天來の神秘を得んとするは皆此積極的放心にして、現代の語を以てすれば、一種の自己催眠の應用なりとす、其他人類の如き複雑なる心理状態を有する生物に有りては、放心の研究も益々複雑なる可し、但し本論の目的に非らざれば、只放心の廣義なる解釋として其例を示せるに過ぎず。

再述せんに恐怖とは知、意の凝縮によりて情に對する刺戟を調節する事不可能となれる爲、不時の變態を呈するに至れる者にして、視線によれる母精の恐怖は、常に此場合に適合する者なりとす。然れ共恐怖なる者は昆虫の如き心理状態に有りては、單に磁氣の結果として論ず可きも、高等なる生物に有りては、必ずしも磁氣の作用を待ちて起る者なりとのみ斷す可き

者に非らず、昆虫に有りても、亦單に恐怖は生物の磁氣によりて持ら來ざるのみならざる事は事實なり。彼の暗夜の恐威が彼等の体美に現はれ居る等の如し。され共高等なる生物に至るに従つて、恐怖も複雑となり、單に生物磁氣の結果たる事よりも、寧ろ他に幾多の原因存する者なりとす。人類にありては、未來の想像に原因せる恐怖の恐怖なる者有り。又過去に起れる恐怖を恐怖する有り。又時には自己を恐怖する恐怖を恐怖する事有り。或は自己以外の人に起れる恐怖、又は起る可き恐怖を恐怖する者有り。要するに恐怖の恐怖は、總ての恐怖の中、最も高尚なる恐怖にして、人類以外の生物にも絶体になしとせざるも先づなしとして差支えなきものならん。

想像の恐怖を恐怖するに有りては、大抵の生物、昆虫類等に至る迄、既に

存在する者にして、卵を保護する母虫の警戒等之に屬す。過去の恐怖を恐怖するは、生物の通有性たる如く、其の遺傳に現る、關係等、此恐怖の記憶なりとす。又人類に有りては、恐怖は心理状態として研究せらるゝよりは、一種の病氣として認めらるゝ事有り。即ち汚染恐怖、接觸恐怖、赤面恐怖等甚だしきは、水癩癩、火癩癩、等に至りては明白なる病状なりとす。其他刀を恐怖し、鏡を恐るゝ等、不思議なる恐怖病有り、但し癩癩等の如きは、火水等の恐怖病より導かれし者にてはなく、其發作的病氣を恐るゝ結果として、水火を恐怖する者なりとも解釋せらるゝも、水火の恐怖なる事は一なり。

汚染恐怖とは、未だ病状として認められざるも、一種の性癖にして、俗にやかましやの事にて、接觸恐怖と共に談す可き分類なり、白色婦人が有色人

を嫌忌する者等に有りては、往々接觸恐怖等出現する事有り。尙同種間に有りても、貧富貴賤の差甚だしきに至れば、同様の顯象有る者なり。赤面恐怖に有りては、處女或は内氣なる兒童に起る事有り。唯に見馴れぬ人に面接し、或は異様なる出來事に接せし際のみに限らず、最も親しき者、或は出來事に於ても、事々に羞恥の色をなす事有り。之れ等は心臓病と關連する事多く、或は他に病氣の徵候となる事有り。或は禍の前徵ともなる事あり、注意す可き事なれども、又一面に處女の羞恥なる表情は愛す可き者なり。

其他赤面恐怖の一種にして、顔面に出でずとも、彼等の心に他人の誤解を恐怖する、神傷恐怖とも名く可き恐怖あり。入らざる空想を假設として、良心を辨護し安心を與ふるに殊更に苦痛を感じる人等、皆此種の病者にし

て、彼の杞^{きし}氏の恐怖の如きは、即ち天災恐怖^{きようふ}とも云ふ可き者なり、之等の恐怖は皆病氣を以て論すべき者にして、他磁氣の作用に非らず。自己の磁氣の感應^{かんのおう}とも見る可き精心病者なりとす。其他団体と団体との如き、群衆^{ぐんしゆう}的心理の病態の出現する事有り。彼の恐露^{きようろう}、黃禍^{かうわ}、排獨^{はいどく}、等皆群衆の罹^かれる恐怖病なりとす。

道草の感有れ共、次手^{ついで}なれば他磁氣の作用によれる恐怖に非らざる恐怖として叙述^{じよじゆつ}したり。

さて恐怖殊に本問に必要な恐怖は、以上の如き自己催眠^{さいみんてき}的現象に非らずして、他の生物の磁氣の反應^{はんのう}によれる恐怖なりとす。尙註釋^{なほちゆうしやく}すれば、視線より來れる恐怖の意義なりとす。

所謂^{いはゆる}恐怖の意義は、網膜^{もうまく}上の刺戟^{しげき}に對する母精^{ぼせい}の判斷^{はんだん}によりて、初めて生

ずる現象なれば、放心^{ほうしん}の如く全々^{ぜんぜん}危害物^{がいがいぶつ}に對する防禦^{ぼうぎよ}的理知^{りち}と手段^{しゆん}とを欠除^{じよ}する者ならず。従つて危險の程度も放心に比して少^{せう}なるものなりとす。今前例^{いまぜんれい}に因^{おな}める通俗的傳説^{とふしよくてんせつ}を引用^{じゆんぎやう}せんに、

樵夫^{しやうふ}を業^{わざ}とする男有りけり。其日も常の如く、一升櫃^{ひつ}と徳利^{とくり}なぞ肩^{かた}にかけ山刀^{やまな}を腰^{こし}にさして程遠^{ほどとほ}からぬ山へ仕事に通ふなりき、定めし昔の事なれば、獵山^{カールサン}とか云ひて、鹿皮^{しかがわ}の山袴^{やまばあま}を着^きし、丁髷^{ちやんまげ}の律義^{りつぎ}な村男^{むらおとこ}なりしならん。此男今日は少しく曇^{くも}り勝ちにて、麓^{ふもと}にも霧^{きり}かゝりて濡^しめやかなりければ、心持ち進まず思ひけるが、仕事の片付^{かたづき}もよしどて強^{つよ}て上^{のぼ}り行^ゆけり。秋の頃なりければ、木立繁^{はな}き邊^へりには馬蛭^{うまひる}等^ら落ち來^きり、草深^{くさふか}き道^{みち}には、蛇^{へび}の類^{るい}も多く、都人^{みやこびと}の想像^{さうぞう}する程^{ほど}深山^{みやま}山往^{やまゆき}は風雅^{ふうが}な者^{もの}にてもなければ、仕^{つか}めは都^{みやこ}の例^{れい}の如^{ごと}く、一日^{いちにち}置きに通^{とほ}ひつけたる道^{みち}とて、鼻^{はな}の聲^{こゑ}も工場^{こうじやう}の

氣笛位きふくゐに思ひつらん、鼻歌はなうたうたひつゝ下駄げだばきにて、岩根いわねの道を何の苦もなく行き過ぎて、秋草あきくさの生おひ繁りて道もなげに見えけるに、此男には何か紫折しおでも見出したらん如く、何々峠たうげよりつと道もなき枯尾花こびなの道にざくざくと踏入ふみり、一谷越して向ふの凹ぼに急ぐなりける、元々道とてはなく、初秋の風に切々きれぐに飛ぶ雲か霧か時々顔の邊あたりに散りては集つひ、寄りては散り失うせる心持ち悪しき日なりければ、さしも馴れたる此男も踏迷ひて一二町遠廻りせし様にて、もごかしく思ひ居たるに、ふと足許より三四間が程に、巨木きよ木の横はれる如き者、急に秋草を巾廣く動かして、浪形に動き出しければ、驚く事一方ならず、先も驚きし者ならん、周章しうしやうとして行き去りぬ。此男も氣強き方にては有らざりけれど、咄嗟とつさの場合如何とも仕難く、くねくねと行く怪物の臀尾しつぽの、するくると短かく。最

後がぼつと切れてあつ氣なき様まで、するくると移り行くまゝに視つめ了り、見送り、ぶるつと振つて、徳利御櫃おひつを投棄なげすて、心も空に、口唇を紫にしたるまゝ、村はづれにて行き會ひたる人々にも挨拶あいさつもせず、すたゝ歸り來り、家人かじんに何事も語らず、一ヶ月程病みわづらいけるが、大方大蛇だいじやに出會あひし物語りをする度毎たびごとに凹ぼんだ瞳ひこみが廣くなつた事ならんなぞ、まで語り傳ふるを聞きたる事有り。

斯くの如く、恐怖は時に放心と別ち難き事有り。然れども此男が最初見付て驚きたるは、云ふまでもなく視覚しかくの働はたらきにて、大蛇の動き出せるは、人間が來れりと思ひたるか、熊くまが來たと思ひしか、兎とに角足音かくあしおとに驚おどきて行ける者にて、未だ此男は大蛇だいじやの磁力圈内ちりきに有りしにてはなく、殊ことに視覚しかくによる本能の警戒けいがいは、未だ放心の厄やくに至らず。少しく時間の問題にをかき

點有れども、徳利と御櫃を投棄て、身輕にして家に急ぎたるは、少しも矛盾なき事にて、多少理性と意志の存在せしを見る可し。
 強き恐怖は放心と同一の如くなれども、自ら其間に差異の生ずる事を吾人は知得したり、放心は如何なる場合に於ても、他生物の磁力圏内に有りし場合を意味し、同時に恐怖は如何なる程度に於ても、未だ他磁力の圏内に入りし意味に非らざるを記憶す可し。幽霊、對する恐怖、妖怪に對する恐怖も皆幽霊、妖怪、の磁力圏内に入りし爲に非らずして、講談師の妖怪談にも恐怖を感ずべし、又聞にも恐怖を感ずべし、(但し人間が幽霊を恐怖するとか、妖怪を恐怖する場合の如きは、元より視覺による可き者ならずして、少しく恐怖に對する前提に反する感有るも、最極に至りては同一義にして、等しく視神經の内的刺戟より來る者とす。)

されば何故に母精の直覺恐怖のみ他磁氣に吸引せられ、視覺を通せる恐怖には他磁氣に母精を牽引せらるゝ事なきやと云ふに、即ち生物磁氣の磁氣に異なる點にして、只其距離の問題に非らざるを知る可し。
 最も強き恐怖は、婦女子等に有りては、所謂失神状態に落ち入る事有るも、放心に於ける失神とは自から多少の差異を示す者なりとす。即ち蘇生の後放心に於ける失神は何等理由を留むる事なきも、恐怖によれる失神は蘇生後に於て益々明確となり、其現狀を物語るにも益々理解の程度を進むる者なりとす。

さて恐怖に於て多言を弄したるも實は昆虫には其恐怖なる者は只其一部に分て、他動物に比して最も恐怖の少なき生物なりとす。従つて放心の場合も最も少なく、蚊、浮塵子等の對蠶蛙に於ける場合、位にて放心の場合

絶えてなき者なりとす。昆虫には鳥類の啄ばむ有り。食虫類の敵有り。常に生に不安を懷き恐々たる可きに、比較的恐怖の少なき理由如何、吾人は磁氣と恐怖とに就て説きたるも、未だ昆虫の恐怖、昆虫の母精の恐怖に就て結論を得ざる也。いで少しく臆測を逞しふして結尾たらんとす。吾人は蟬と螻蛄との話によりて、蟬の恐怖を想像し得るも、蟬に恐怖心の少なきを記憶せざりしならん。何故に蟬に恐怖少なく。何故に蜘蛛に寄る銀蠅の歌の吞氣げなるや、疑問は益疑問なり。されど余は斯く斷定を下して憚らざるなり。

曰く生微より生化して、週日にして死する有り、蟬の如き二三時間なる者有り、最も永き者も、一二年にして、蟻の雌の如きは七八年の長年月に渡る者有りとするも、例外と見る可く、先づ春に孵化して、秋に死ぬを通

則と見ざる可からず。即ち昆虫の生は、平均二三ヶ月の者にして、生に於ける經驗も薄く、且比較的的心理状態も單純なれば、其強食となれる場合、其排泄物等に附着し耕泄せられて、再び精に蘇生し、同種の磁氣に感収せられ、且生に於て經驗せし恐ろしき記憶を若き精、及び子虫に教示、傳説する事なく、容易に還元して生微となり、強者の体内に同化され再び生の記憶に立歸る事困難なればならん。余は之を以て精の還元消滅なりとす。然れ共他の生物に有りては然らず、比較的的心理状態の複雑なると、生に於ける年代の永く、従つて生に於ける經驗も多く、且記憶も深刻なる等、死後の生の確實を期する所以にして、古來大學者の以て不可解なりとせし人類社會の慘劇、殃難等の意義は茲に至りて、明白なる如き感あるなり。而して人類以外の生物も、以上の外体軀も比較的大にして併吞等の場合少な

く、例えば鼠の蛇に丸呑にせられたる場合も、昆虫と同一視し難く、又蛇の如き生食する强者の地位に有る者を見るも、亦生理的に食餌となれる者の精を遊離せしむる如く、構成せられ居るに徴するも明かなり。見よ其尾端の随意なる生氣の満ちみちたるは、食餌となる生物の精を排外する作用たらずんば非らず。況んや人間の如きは、生物を吞食し、或は生食するに不適當なる者なりとす。其靈の如きは寧ろ不滅に近き者にして、其他々動物に有りても、精の年代は世襲状態等により、不滅に近き者なるを信す。

表 情

大日本百科大辭典に

(表情) 感情に伴ひて起る生理的變化、狹義にては筋力の運動に現はるもの、いはゆる表情運動を稱す。これらの表情のうち、感情一般に共通なるものとしては脈博、呼吸に於ける變化、血管の開張、縮少、筋肉の興奮及び弛緩等あり。特別なる感情に伴ふものとしては分泌器官、例へば汗腺、汗腺等に於ける變化及び手肢、容貌姿勢に於ける變化等あり。表情の起原に關しては、ダーウイン、スペンサー、ウインド等の諸家説を立つと雖も要するに一家言にして未だ表情に關しては普通の感情説と正しく反對の態度を採る學説あり。即ち感情に伴ふ生理的變化又は表現運動は情緒の影響によりて生ずる感覺を以て畢竟感情なりとするものにして、「吾人は悲しきが故に泣くにあらずして、泣くが故に悲しきなり。」の語あり。特に複雑なる感情即ち情緒に關して此説あり。これをセームス、ランゲ説といふ。(速水)

の如く心理學上の問題として論ずる時は、多々複雑なる議論を生ずる事ならんも、余は只昆虫の對他的動作を取り來りて昆虫の表情となし、以下少しく述ぶる所有らんとす。

吾人は昆虫の本能の働きは視覺の働きに一致する理を説きたり。しかく目が昆虫に有りても、機能の主要部分なるにかゝはらず、他の高等動物の如く眼を有して光線の調節、其他喜、怒、哀樂に因れる表情の變化もなく、只造り付けられたる儘の不恰好なる複眼、或は單眼は多くは強威の情を誇示するより外に、何等の表情をも認めがたし。然し彼等の表情は吾人が想像する程簡單なる者に非らず。彼等にして一度強敵に遭遇せんか、最も明かなる様々の表情を知覺するならん。

彼の昔日武人の敵打ちか、其他真劍の果し合に遭遇せんか、當人等は勿論

見物人にも、緊張したる表情の想像せらるゝ知く、昆虫は自己を警戒し、保護する時最も緻密なる強き表情を示す。何處となく体全部に満ちみちたる有様は不思議に威が有るなり。一心になれる彼等の精の力が如何に、吾人に、及ぼすかを思ふ可し。

喜、愛、樂は一樣に彼等の觸角の振動に困りて、巧に表現せらるゝこと有り。同類の愛、異性の愛、生活の樂、食餌の喜、は皆觸角に因れる表情にて、綿密に表現せらるゝものなり。多くは愛の時は觸角の端を持ちて軽く他虫の体部に觸るるものにて、云はゞ兩手を伸べて柔かく撫でさするなり。或は彼等には喜びも、愛も、樂も未だ不明にして同様に、只其程度のみを存じ居るのかも知れ難し、但し是れは只單純を意味するものに非らず、寧ろ複雑なる感情の不分の域と云ふ可きものならん。

虫は交尾の節強き愛情を色々に表示するものなり。或虫は雄の脊に分泌液を出し雌虫交尾中其分泌を嘗めて無限の愛を止むると云ふ。或る者は交尾ながら比翼を揃え、恰も同体同心の如く、空間を飛翔し右往左往する。つまり喜、愛、樂が巧に融和して餘念なき様なり。

或は蠅の如く愛の轉々たる物、白蟻の如く持久なる者、蟋蟀の如く纏綿なる者、等悉く彼等の心理の意外に複雑なるを吾人に示すものなり、其他意志の保留、傳達、交換、等其微細にして且つ透徹的なる事に至りては、唯吾人の警嘆措かざる處なり。今試みに最も社會組織の複雑なる蟻に就て見るに、温かき春の日なぞ南面せる庭の薔薇に、無數に繁殖せる油虫、普通蟻牧と云へる如く、蟻と共生して利益の交換をし、子々孫々蟻の忠良なる保護に對して、彼等が分泌する甘露を與ふる事は、吾人の能く知る處

なるが、蟻が此牧場を見廻る時、蟻の愛は絶えずアリマキの上に灑がる、事、殆ど牧童の小羊を撈するが如く、小羊の牧童を慕ふにも似て、面白き詩の幾多漂へるを思ふ可し。

本篇の立場より論せんに、昆虫の表情とは、感覺に對する母精の理解が外向的に筋を支配したる者なりと、定義を下す事となるなり。されば此昆虫が對他の反應として、一肢或は其觸角を微かに動かしたりとせば、其一肢其觸角の振動は母精の理解が何物たるかと同一の意味を有する者にして、微細なる考究によらんには、餘りに複雑を來すなる可し。

昆虫の一肢一觸角の移動により、其昆虫の母精なる者の意中、即ち感覺に對する理解の何なるかを客觀する事は、最も至難なると同時に、吾人の想像をも難からしむる者なり。換言すれば、昆虫の表情を読み得る者は人間

に非らずして昆虫なり。而して他種よりも、同種類に有りと云ふに有り。然らば昆虫相互、若しくは同種間に有りては、其れほど複雑にして微細なる観察力を有するならんか、「何故に」「如何に」有するならんかは、當然吾人の要求する疑問たらずんは非らず。先づ一昆虫の一肢の移動が、他の昆虫に取りては何を意味せしか、將少しの誤認もなく了解する者なりや、少なくとも事實昆虫相互間の表情は意義をなす者なりや、否やを考察せんに試みに成熟したる人類を、何等言語文學等の媒介なくして同棲せしめんに、例へば米國等の如き世界的人種の雜居する地方に見る如き、啞的交際を見るに、理解の程度は時間の問題となり、是れを腦力の差に因りて見れば、時間は反比例するものなることは、余の親しく経験したる所なり。此推理を眞なりとすれば、昆虫相互間の理解は吾人が考ふる程難き者ならず。

従つて比較的正確なる者なる事を推理すべきなり。況んや甲なる昆虫の一肢の微動、觸角の移動が母精の感覺に對する理解の表示にして、其まゝ乙なる昆虫の視覺によりて結び付けられたる乙の母精が恰も凸レンズに因りて集中せられたる、光線の其焦點をよぎりて、再び放散したらん如く、而して其焦點より一直線に等距離に於て、垂直に切斷したる面を想像せんに吾人は同一に感ずる如く、兩虫の間に其焦點を想像し、甲母精の理解を乙母精の理解と全く等しき事を推理するを得るなり。然らば吾人人類は何故に、以上の理に敵應せざるならんかと思ふ者有らんも、其は他の問題に屬す可き者にて、一言すれば、忘却したる本能の中に數ふ可き者なり。斯く觀じ來れば昆虫は言語の媒介なくして、より以上簡易に且完全に意志の疎通するものなりと、云ひ得るならんか。云ふに、先づ然りと斷定せざる

を得ん。然し未だ簡單にして粗雑なる意志の交換に過ぎず。其種類と相互的關係の疎密とにより、幾多意志表示の方法も異なる如し。加之ならず同じ習慣に成熟したる者と、異なりたる習慣に生活したる者、即ち言語を異にするも、同殖民地若しくは歐洲人相互間に於ける表情、及び東洋人と歐洲人間に於ける表情の習慣的差異により、第二者の了解は常に正確ならざる如く、昆虫間に有りても常に投影的正鵠を信ずる事も難く、且つ其れが相互的了解の程度なる如くなるも、觀念の單純なる昆虫に有りては、表情の異なるより來る誤認が、人類間に存する如き者有りとは推斷するは、未だ皮層の見なるが如し。余は臆面もなく昆虫相互間に於ける了解は、習慣的表現の差異によりて絶対に誤認を持ち來す事なし、され共表情の差異は多々存する者にして、甲乙の昆虫の何なるかに應じて投影的理解の程度は萬

別なり。但し其間少しの誤認も存せず、只乙の母精の經驗、不經驗によりて知、不可知、了解、不了解を生ずる者なりとす。即ち投影物の不明瞭はレンズの具合に因り、光線の透過に多寡を生ずるに等しきものなり。昆虫の表情の種類は種々雑多なる可けんも、先づ第一位に擧ぐ可きは威赫、若しくは虚勢なりとす。威赫は強者の特權にして、虚勢は弱者の技能なり。然れども威赫も虚勢も等しく、自己保有の意味より來れる本能なるは勿論なり。威赫は又他の語によりて、尊大、或は虚心等其程度と必要とに應じて變態を有し、時には常習的性癖となれる者等種々有り。虚勢は弱者の技能なるも時には虚勢は虚勢に非らずして、威赫なるやも知れ難きも、多くは虚勢は虚勢なるを常とす。曲言すれば虚勢は驚怖を伴へる威赫の事にして、昆虫の特性なりとす。

警戒色は虚勢的本能の産物とも見る可く、昆虫獨歩の文明なりとす。
 其他昆虫には只に自營的緊張したる表情の他、彼等は其平常に於て平和なる表情を有す。彼の異性に對する單純なる愛の表情のみならず、時には高度なる愛とも稱す可き嫉妬の存在を見る。甚だしきに至りては嫉妬より争鬪を引起す例少なからざるを見るなり。
 嫉妬は不秩序なる欲望の一にして交尾期に近づくに連れて強度を増す者なり。昆虫に有りては生活の一大動元なる者にして、雌雄の存する所、愛の存する所に必在し、生命を持続せしむる機能なりとす。之を赤裸々に陳述すれば、嫉妬は母精の不秩序なる欲望の表現とも云ひ、熱烈なる所有欲なりとも云ひ得るなり。而して其欲望が昆虫の生命を保全せしむる所以は唯に昆虫のみに限らず、生物一般に取りて重要問題にして頗る興味有る問題

なれ共、又約言すれば數言にして足れり、曰く生命とは肉体と精の結合にして主觀視すれば自營的過程其物に外ならず。故に生命有るを欲する者は精の仔虫保存に對する能力を要す。其仔虫の全からん爲には、成熟したる母精の擁護なくして存する者に非らず。而して「母精の欲望は母精の存在保証なり。」且「不秩序なる母精の欲望、或は熱烈なる母精の欲望は、母精の存在に對する強き保証なり。されば人類に有りても、欲望の強烈なる者は強健にして、長命なるものなりとす。
 斯く嫉妬は生命の一大要素なる丈昆虫にも多く表現さるれ共、他の生物に比して遙かに少なきは恰も生の長短の比を徵するが如く思はるゝなり。
 昆虫は生物中比較的輕快なる生物にして、其特長とも見る可きは輕侮的戲謔なりとす。

彼の蠅の如き同種間に有りて、机上其他の器具等の上に折重さなり、衝き合、飛びつ離れつ、嬉々たる様を見るならん。彼等は單に同種間、或は弱者のみならず、強敵に對しても不真面目に戲謔するものなりとす。

其他の昆虫に有りても、常に嬉々漂々たる者あり。稍々靜的なる者に有りては、容姿の整頓、即ち身つくろい、或は御しやれ等に相當する所作有り。馬追が前肢に唾液をぬりて長き觸角を梳する如し、或は蠅の御化粧、蝶の体操等皆此意義による者なり。

昆虫に喜怒哀樂の存在は上述の如く明瞭なるも、人類間に置ける如き顔面筋の表情に相當する表情を昆虫間にも見出し得るものなりや、を考察せんに第一昆虫の目は造り付けられたるまゝのものにして、何等表情の變化なかるべき事より推斷すれば、頗る疑はしき者有れども、神經中樞に近き部

分に最も敏活なる表情の出現を想像す可きは自然の推理にして、強ち顔面の表情を忍せにし難きを思はする者なり。試みに蠅の斧を身構えたる時を想像す可し、必ず先づ餘裕のなささうなる小さき三角頭に、其大半をしめたる恐ろしき目と、尖りたる意地悪さうな口のもがきとを見るならん。吾人は彼れの顔面のみを熟視する事によりて、兇猛なる他生物の恐しき相形を連想せしむるなり。少なくとも顎齒の働きは、彼の心情を物語るものにして、平靜なる彼、或は争鬪後の彼れの面とは少なからざる差異有るを見るなり。其他の昆虫に於ても怒り、恐怖等の場合に明確なる顔面の緊張を見るべし。されば吾人は昆虫に有りても、顔面の表情は他の部分に比して、より多く且つ巧妙なる表情力を有するものなる可き事を信するも、過ちに非らざる如からん。只昆虫の顔面の變化を觀察する事は至難なる事なる

と、吾人が餘りに不用意なるとに因り、不明分なるとするも、昆虫間に有りても常に顔と顔と對合する所を見れば、顔面の表情は他の部分に比して遙かに複雑なる者と推斷するを得るなり。されば彼れ等間にも怒りに對すると等しく、喜びにも、悲しみに、楽しみにも、其れ／＼顔面の變化有るを信せんとする者なり。彼の馬追の長き觸角を動かして他虫に對する社交態、蟻のアリマキに對する官吏態、等皆昆虫相互間に有りても、顔面の微細なる表情を知覺するものならん。况んや其相の千差萬別有るは、彼れ等の形態大小の存する事よりして察するに難からざるなり。幾千幾萬の蟻軍に有りて、別段に隊別もなく、個別的名稱もなき、彼等は一々彼等の相によりて互に識別し得るなる事は彼等の本能が視覺に於て最も著るしきものなる理より容易に察せらるゝものなり。まして美醜の標

準、好惡の感念等皆視覺に訴ふる事によりて、目に近き面部の表情は他の何れの部分に比して重大視せられ居る事は争ふ可くも非らず。然れば吾人は昆虫の表情も皆彼等の顔面筋の表情を連想して、初めて全きものたる事を云はんとするものなり。今雌雄情意の相投する有りて、雑沓たる群衆を離れて、甘き歡樂に暫し沈溺せんとし、寂寞に歸せんとする彼等は、老弱をはかなみて寂寞に歸せんとする、最後の彼等と、多大に趣を異にし、従つて表情も異なる可く、特に顔面の相違は想像するに難からざるなり。最も緻密なる觀察の熟練を得るに至らば、複雑微細なる彼等の表情を知得し得んも、先づ吾人は昆虫の感情の有無輕重如何を考察する事を必要とする。昆虫は喜、怒、愛、樂の中、喜、樂は一般的、常在的要素にして、怒

りは特種的、愛はペリオド的の者なる如し。喜、樂の一般的常在的なるは、其視覺に對する刺戟が常に彼等に取りて、快なる情念を與ふる事は前述の如く、如何なる昆虫に有りても終生愉快なる者にして、同種間或は周邊の事物に對する愛は平常に有りては、喜、樂に没却せられ、只彼等は自由の快に付き、快に沈溺してあたらず春宵苦短の趣有る者なり。怒りは特種の虫類例へば蜂、蟻、サソリ、蜘蛛等の如き者に有りては、稍明白なるを得るも、他の一般的虫類に有りては頗る觀察し難き感有り。然れ共嚴格なる意味に有りては怒りも、喜、樂、愛と等しく、母精の情念によれる各半面なれば、絶体に存在を否定し難きものあれ共、まづ怒りは母精の情調より來れる狂態にして母精の存在箇所、即ち虫の性質によりて有無の分岐せらるゝ所なり。而して昆虫に有りては一般的なりと見る能はず又特種の虫

に有りても常在的の現象に非らざるものなりとす。愛は平常は快なる情念の中に潜在して愛なる形態に於いて表顯せられざる者にして、彼等が漸く成熟するに至りて、單一なる快に倦怠を感じるに至り、其中に潜在したる部分は、漸く個有の性情に復歸し、幾多の過程の變移を通じて、生物の有する最高の愛なる異性の愛となり、花粉の香のかんばしさも、花の蜜の甘さもついに彼等の歡心を買ふ能はざるに至り、連理たる白蟻の愛、鬼蚊の交尾等執拗なるものとなるものなり。又愛は母精の要求なる點より考究すれば、昆虫の成熟するにつれ、腹方に置きたる第二の母精たる所謂、快なる要素の分裂により、母精の性情に惑亂を來し、昆虫等に有りてはついに常調を保持する事艱難となり、暫時腹方に勢力を奪はれ、いつか生殖機能の發育を來し全く一身の主權は、尾頭轉倒するに至る者なりとす。

笑なる者は人類に有りては娑婆の一日目に鳴き、百日目に笑ふとか。さして複雑なる理性の働きを要求するものにもなく、大人より小兒は多く笑ひ、男子よりも女子は多く笑ふ、されど人類以外の生物に笑ふなる表情の存在するものなりや否や、俗に馬が笑ふ、蛇が笑ふ等の言有れ共、他生物の笑に對する研究は艱難なる丈、趣味も有るものならん。而し昆虫の笑等の事は未だ吾人の耳にせざる所なり。

笑ひは人間に有りては比較的淡泊なる意味にして「さもない事が笑の種となり、」への様な事に笑ひ興する」等最も適切なる言葉なり。悲しみ、怒り等の強き外來刺激に對して笑は淡き動機によりて生ずるものなるは他の感情に比して感覺器、反應器を通じて外向的に豫備せられたる何者が存するものにして、一寸觸れても處女はくすくし一寸顔を振りても乳兒は笑

むものなり。

笑の種類は多くの學者によりて研究せられたるならんが、余は別段深き研究によるに非らず、只通俗的に笑なる表情を列挙しみに先づ笑の中、最も通有なるは、からから笑ひ、ははは笑ひ、ふゝゝ、へゝゝ、ほゝゝ笑等の大人笑より、にこゝの小兒笑まで、數ふれば少なくとも十五六種の多きに至るべし。是等の笑の中不可知なる外向的豫備の反應の遲速は、笑の性質に多大なる關係を有するものにして、一寸して直ぐ出る笑ひ、奥底より鈍く出るもの等、其遲速の程度は思慮の程度にも比すべきも間々善意の程度ともなり。にたゞ、にやり等の笑は動機の如何に限らず底氣味の惡しきものなり。

笑は一言すれば快なる情調なるものなれば、昆虫の如き常に快なる情調の

充實したるものに有りては實に否定しがたき表情たらずんば非らず。
 さらば悲しみは如何、秋の虫のいと悲しげなる聲々に對する人類の感想は
 一つの秋も、西も東も、憐れに淋しきものなりとせば、虫其物と悲哀とは
 そも如何なる關係を有するものなりや。吾人は直に云はん、虫は悲しめり。
 見よ胡蝶の初霜に枯れて行く悲哀を見よ、一つ一つ鱗の落ち凋み行く霜の
 夜に、不安と寒さに、而ら虫類に取りては比較的永き時間に渡る蝶の最
 後に悲しみなくして何かせん。又試みに蠅の羽根を取り去り、或は肢をも
 ぎ取り放ら見よ、彼等は奇禍に泣くにあらずや、彼等の哀聲は憫々として
 吾人の身朶を放つには有らずや、と宜べなるかな、悲哀の状は虫類の最後
 に於て最も切實なり。然れ共實際は昆虫には左程苦痛、悲哀の存するもの
 に有らず。其は稠落に先ちて生殖するものにして、生殖の際彼等の知覺は

第二の母精の喪失により遲鈍なる情態に入る事と、冬眠の豫象とに原因し
 て彼等の凋落は悲哀を感せざる無意識の行爲なりとす。翅をもぎ取られた
 る蠅の場合に有りても、蠅自身には痛より來れる悲しみの存する爲にては
 なく、只單純なる身体の變調より來れる恐驚と、憤怒とのみにしてむしろ
 無意識の行爲に屬すべきものなりとす。
 以上の如く表情を肯定するとするも、未だ同種間に於ける意志の交換程、
 總ての別種間の意志交換は完全なるものに有らず。其程度は如何程なるか
 は詳かならざるも同種間と、他種間とは自から了解の程度に徑庭有るべき
 事は既に説きし所にして、同種間に、より以上完全なる意志交換作用も、亦
 同時に承認せざる可からず。蟻の如きは明白に相互間に細かき意志の傳達
 交換等の行はるゝ事は事實にして、従つて群生する虫は單獨棲の虫に比し

てよりよき文明を有する事も實事たる可き理なりとす。

今其同種間に於ける意志交換に就て一例を取らんに、一日大油虫(脈翅類)を殺して庭前に放置せしに、何處よりか澤山の蟻軍より集ひ、殆ど針を指す餘地もなき程なり。何事を爲すならんかと思ひ暫く見て有りしに何處にか運びさるならんと思ひしに、豫想に反して蟻軍は一匹、一匹彼等が出會する度毎に觸角と觸角とを一すくんと接觸せしと思ふ間に、何時か二三寸離れたる稍凹める箇所に移送し初めぬ。然して急に彼等の行動が烈しくなれるに、何をなすならんかと、尙も好奇心を持ちて熟視したるに、各自の大きに六七倍も有りさうなる砂利をてんでに運び寄せ、仰向に死し居る油虫の頭より頸、果ては体全体、足に至るまで見る／＼埋めつくせり。はてな貯藏に堪ゆるものなれば多分埋め置きて冬季に食するならんかと思

ひ居たるに、凡そ一時間程経て後、今度はより澤山なる蟻軍となり愈々運搬を初むるなり。

さりとて砂利にて埋め置かずとも運搬す可くんば直様運搬に着手す可かりしものと思ひぬ。要するに彼等間にも色々群議の齟齬も有り、變更も有る物なる如なり。蟻の中には捕獲物を一應臨檢する指令官や技師の如き者存在す可きや、又は直覺的動議に因りて一決せらる可きや、即ち精の合集點なるものに支配せらるゝならんかは不明なるも、先づ後者を擧ぐ可きならん。

所謂蟻の王様なるものは只生殖に關して特種の意識と持つも、何等他の方面に於ては關係を見出す事なきを信するものなり。然れども彼等は各自立脈なる意志を表はし得るものにして、「何處に何が有り」「何々は如何にす

可きものなり」「勢に不足有り」等個々の意志の交換傳達は皆觸手と觸手の接觸に因るものにして、吾人が想像する數等以上精細なるものなり。且完全なる意志の傳達が行はるゝ如なり。他昆虫も相互同種間に行はるゝ意志交換が常に必ずしも觸角若しくは觸手の接觸に因る者ならざれば、觸角の接觸が最高なるものなるや否やは斷じがたきも、先づ比較的社會組織の複雑なる蟻等に有りて、此接觸意志交換が行はるゝを以て見れば、此方法によれる意志交換が昆虫界に置ける意志交換法の最高なるものと斷言するを得べき筈なり。加之ならず此方法（假りに觸話と名く）に因る昆虫の意志交換を考察するに、觸角は昆虫の種類により色々有り、稻虫の如く相連鎖せし棒状なるもの、烏の毛の如き、櫛状或は末端の突起せし者等雜多なるだけ、其機能に於ても亦異なる點多からん。兎に角觸角は昆虫の持てる

機能の中視覺に次げる敏活なる働きを有する者にして、殆ど精の露出部の如く想像するに適す。そは遊離せる母精の生存する唯一の箇所と見る可く、若し具体的説明に假托すれば、觸角に據る精は恰も稻の葉を攀する朝露の如く、自由に其根部より末端に、或は末端より根部に浮動する者と想ふも可ならん。此露出部と露出部との接觸は、彼等が視線のみに因りて、即ち彼等の表情のみによりて意志の疏通を求むるより遙かに、遙かに細密なる可き理なり。

人類の文章、言語等が往々感情の微妙なる域に立ち入り難きに反し、能く表情以外の或る者が巧みに足らざるを補ふ如き感をいづく事あり。實際吾人は其何物たるかを注意せざるも、要するに人類の言語も、文章も未だ大完の季に非らずして、不文の意志交換方法より離れて、言語を生じ、文章

の媒介ばいけいによるに至りたるも、過去幾千年間は、畢竟過渡期に過ぎず、と吾人をして呼ばしむる事有り。故人はまづ若き男女の間に此種の關係かんけいを見出せり。簡單なるものは複雑なるものよりも、文章に書き顯あらはし惡しき場合有り。感情は理論りろんよりも言語に云ひ表はし難き者也等、様々の方面に言語や文字の不馴れなる點を感じるは不可思議なる事實なり。或は心理學者をして文字は最高生物の取る可き意志交換方法にあらざる事を極言きよくげんせしむる時代有るやも計られず。されど實際に置いては、吾人は只相互に感觸かんしよくしたるだけにては、何の意味をも生ぜざる如になり居り、第一者の意志は其強弱緩急の秩序ちうじよを待ちて明白に了解りようかいせらるるものにして、恰も音樂のキーノートによりて意味をなす如く、其秩序が即ち意義を明瞭めいりようならしむる言語なれば、吾人の考へを持つてすれば、如何に心理學が發達はつたつしたりとて、言語

以上明白なる意志の傳達でんたうは不可能ふかのうなるが如し。昆虫の如き簡單なる生活状態に有りては、此觸話しよくわなるものは最も進歩したる恩恵なり。何の動物に限らず、聲音機せいおんきが簡單なる感情を表はすか、全く無聲なるに係らず、能く同類の好愛、異性の親みの緬密めんみつなるは、昆虫の觸話に於けると同一に、母精の接觸に因つて、意志の傳達、交換の行はるる所以ゆゑんなり。

人類に有りては最も複雑なる社會を形成し、最も複雑なる意志の交換、傳達の必要なる現代に有りては、前述の如く、他動物の如き單純たんじゆんなる方法による能はざる事は、知る可き範圍はんい内に有りては先づ合理ごうりなるが如し。

然し吾人は現代に有りても、尙他動物の意志交換方法と同一なる交換方法を米國の如き先進國の學者は好んで研究し實驗じつけんしつゝ有るを聞くなり。此

實驗的現象は吾等人類の原始的祖が、如何に他動物に近く生存せしかを同時に吾人に教示する所のものたるは論を待たざるなり。所謂觸話なるものは實際に有りては、特種の虫にのみ行はるゝものにして、一般的のものならざる觀有り。尙觸話の技能を有するもの、例へば蟻に有りても他の昆虫と觸話を試むるならんか、即ち蟻に蟻牧虫との觸角の接觸が有るならんか、と云ふに決して觸話は行はれざる如し、彼等の間には、異様に城壁が設けられ居りて、容易に打ち溶け難きもの存するもの如し。蓋し彼等相互間には異なりたる種類なりてふ、明確なる思考力の存在する故なるべし。然れ共前述の如く昆虫相互間には、其種族の同じきと異なるとの差別なく、比較的明瞭なる意志の交換行はれ、常に頻煩なる連絡の存するものなる事は事實にして、アリマキが虫の官吏たる蟻の保護者により

て、比較的安楽に氣樂に生活する事は他の虫に比して多大なる特權にして、且誇りたらざるべからず。従つてアリマキの蟻に對する信頼と、了解は深大なるべき事多言を待たず。共棲する種類を異にする虫は、互に強き了解を有するものくの如く、只同種間に比して少しく疎なるもの有るのみにして、昆虫間に有りては犬と人間程懸隔を感じるならんかとも思はれざるなり。寧ろ昆虫に置ける幾萬の種は其れ丈の虫の種なり、と吾人は感ずる如く、總ての虫は等しく虫なり、と相互間にも感ずるものの如く、従つて荒野の草裏は人類の想當せざる樂しく且殷盛なる雜居の世界なるなり。以上の地歩よりして、觸角を見る時は觸角は意外に有用なる機官なる如きも、又一面より見れば人類の頭髮の如き、比較的輕き位置に於けるものとも比し得べき觀有り。今試みに嚙虫の如き取り扱ひ安き觸角を有する昆虫

に就て見ん。先づ其昆虫の觸角を缺を持ちて突然切り取りたりとせんに、第二の母精は朝露の如く其觸角の根部より末端に、或は末端より根部に、自由に浮動するものと想像す可き者也とは云へ、其母精なるものは切り取られたる觸角の部分に附着して取り除かるゝものにもなく、蜥蜴、蛇の尻尾の如く、切り取られたる部分の觸角が蠢動するものにもなく、只僅かに其虫が異様に感ずる位にて、其虫はぐる／＼邊りを廻つて見たり、或は前肢を以てなでて見たりする位にて、別に生存に差支へなき處を以てすれば、吾人は直ちに觸角に於ける精は、常に虫類の体の何れの部分に有る母精よりも、獨立的要素に富み、所謂「マテリアライズ」して居る精なる事を知覺するならん。觸角を失したる虫は必ず馬鹿に成りたるものならざる可からず。然れども此虫は永久に知覺の鈍き不具者なる可きか、と云ふに

決して然らず。間もなく普通の常態に返る可きものなり。即ち觸角に於ける精は既に述べたる如き獨立したる行動の自由を有するものにして、切斷せられたる觸角の部分と、其虫との距離、或は其存在の箇所とに係らず、此虫の頭部に歸納せらるゝものと見て相違なきものの如し。其他表情は外界よりの感觸によりて、種々様々に異なる可きも、先づ感觸の主なるもの、即ち目と觸覺とに因りて感じたる結果のみと見て可ならん。目、觸覺の外に昆虫にも聽覺有り、嗅覺あり、又觸覺と同様の作用をなすため、脚部等に微細なる毛を生じ居るもの、毛はなくとも蚊の如きは、若き間は羽毛の如き立脈なる觸角を有するも、老ゆるに至りては其作用は漸時減退し、遂に感觸の作用は第三肢の一對に移る如き者有り。或は蠅の如く觸角を全々欠くもの、觸角を有するも知覺よりは粧飾的のもの有り。要

するに本論に於ける感觸、殊に觸覺に對する研究は、勢精の居り所と昆虫の特長との關係に關連して進行す可き必要を生じ來るなり。只其一二の例を試みんに先づ蚊の如きは前説の如く、日光の知覺に因りて睡眠を催ふすものに有りては、より以上知覺を過敏ならしむる精を觸角に置く事は生活上不利なるものにして出來得るだけ知覺を後部に敏ならしめて、殘餘の精を保存す可きは自然の要求なり。蠅の如きも繁殖力の偉大なるもの、即ち一疋より數十の精を雌虫に輸送する虫に於ては、精の拾集上、及び拾集したる無数の精を交尾して雌虫の体内に移殖する迄保存する爲、知覺の穎敏なる神經組織に近く置く事は、之また生存上不都合、且有害なる事にして、自然に彼等が自己保存の意味に於て、合理的に精を各自の後方に置く如く構成せられ居るなり。

斯くの如く昆虫は皆精の居り場所と其機能、及び特性とに偉大なる影響を持つものにして、而も總てが生の繁榮を辨護する如く配合せられ居るものなりとす。

彼のサソリの如く例外と做す可きものも、緻密なる觀察の許には遂に正當なる理由を見出す可きものやも知る可からず。

生 殖

昆虫の生殖は前述の如く、聽覺の刺戟に媒介せらるゝ事あり。他動物と等しく、雌虫の生殖器の成熟の刺戟、即ち視覺を通じて得たる、母精の氣臆に始まる事有り。其方法、状態、交尾期間及び時間等、種々雜他なるもの

にして、我國にても昆虫の生殖状態のみを研究して居る學者が有ることは或る雑誌を見て承知したるも、未だ何等研究の發表を見ず。余も亦餘り昆虫の生殖に對して研究したる事もなく、頗る材料に窮する次第なるが、交尾が生物の一大本能なる點に付て、少なからざる趣味を有するものなり。學者は交尾と生殖との間に多少意義の差を付し、性慾の遂行を、受胎作用となし、前者は意志の支配に置き、後者は支配外に置く等、二様に區別して論ずる如なれども、茲には唯意義の混同したる一般的解釋による。人類の生殖は、身体の發育が畧完成に近づきたる頃より始まり、時代と地方に應じて早遅の差を見出す可きも、昆虫は、發育が其極度に進みたる時に於て始まり、従つて生殖の本能を論せんとするものも、一般的生物の上に立論する事は頗る疑義を生じ安く、其論據を如何なる生物に置くやに有

りて、多岐なるを免がれず。先づ泰西の學者間にも議論の一致せざるは、生殖を以て利己的本能なりや、將利他的本能とす可きや、に就て、可成異なりたる論旨を見出す如にて、利己的なりとするものに有りては、我國古來の思想の一大勢力となり來れり、早く子供を作り、早く子供に自己の財産事業を譲り、早隱居でもすれば人生最大の幸福と思ひ、女子でも出來て、少し美人でも有れば、藝者にして早出世をさせ、自分も左團扇で一生成樂に暮せるなど、頗る生殖は自己保存に的中して居るなり。歐洲にても、奴隸賣買の行はれたる時代等に有りては、同一の事柄なりしは論を待たず。利他的となす理由は、女房は太るが壇那はやせる位に考へるものもあり。事實貴重なる部分の移植は、生理上何等か以上の理論を見出し得るやも知

れず、然し女子より見れば利己的なり。翻つて昆虫より論ずる時は、一見利己的本能として、其仔虫に反哺の勞を期待して生殖する譯にてもなく、全然此種の本能として見る可き根據なき如し。

況んや、一般の昆虫に有りては、生殖によりて、自己の生命を短縮するに於てをや、然れども、全然利己的本能ならず、と主張するは、尙皮相の觀なきに非らず。

さて、利他的方面は如何、雄虫は生殖して死するも、雌は生殖により新らしき生命を受け、大に勢氣を増すの感あるも、等しく産卵の後、死するもの多く、何等生殖に因て得る自己の利益はなし、因て生殖を以て自己的となすも、利他的となすも、等しく力なき論旨なりとす。

次に、一般的なるは、生殖を以て自己保存となすや、將亦種族保存となす

や、の點に於て、自他の輕重を論せんとするに至りては、少しく傾聽する價值あり。

自己保存論者に有りては、生殖を以て自己の性慾の満足を以てする有り、前記の、老後に於ける自己の安逸を以て徹底したる論據とする有り。然れども、昆虫の如きものにありては一瞬の快味を以て死を購ふ所以なれば、其性慾の遂行を以て直に自己を破解こそすれ、保存の理由とはならず。

老後に於ける自己の安逸の如きは、論者の考ふるものと同形なるものなし。

シヨウベンハウエルの如きは、種族保存に有りと論ずる學者なり。

種族保存論者の主張は、昆虫に其根據を求むるも、將亦人類に其例を求むるも、等しく矛盾する點を認め得ざるも、生物は、等しく生殖すれば子が出来るものなれば、生殖が種族を保存する位の事は、何等得がたき眞理に

でもなく、餘りに平凡なり。

交尾の快感は、昆虫にも存在す可きや、の點に就而考ふるに、前述の如く交尾期に於て、母精を、腹方部を通じて尾端に集中する作用により、尾端の知覺濃厚となり、少なからざる快感を生ずるは推理し得可し。

生殖の本能は交尾に伴ふ快感に因て誘致せらるるものなりや、異性を好愛する極致の表現なるや、の點に就て考研せんに、人類の如き高等動物に有りては、交尾を愛の純化なりと觀す可きを、最も至當とすれども、事實は常に然るを得ず、一瞬の快味を欲して、心なき情交は遂行せられ、愛なき結合の結晶たる憐れたる罪惡の子を社會は數限りなく収養しつゝ有り、現代の状態より見る時は、中々此種の矯正に對しては、法律の權威も、宗教或は道德の力も、此一瞬の本能を支配する事は難きものと見え、至る所文

明國に於ても、彬々として其跡を滅せざるは不可思議なり。况んや、他動物が、一年中、只或る短かき季節にのみ與へられたる本能の發露に對して、人類以上の強猛度なきは、寧ろ自然なる出來事なり。然れども、鶏の如き年中生殖が仕事として行はれ、實に一瞬の接合は、全く喫茶飯に過ぎざるものも、他動物と等しく愛なき交尾はなき如にて、此點に於て、異性の愛と一瞬の快さを分離し得るものは、生物中人類有るのみと云ひ得るならん。尙一步進んで廣義に解釋すれば、人類の愛なき結合と云ふも、其性慾を遂行する間は、好愛の念が充滿したるものにて、遂行後即時に愛が滅却したるものか、或は性慾遂行後短かき期間でなく、比較的永き時間を経過する間に、其愛人に對する愛よりか以上の愛を、他に對して新たに生じたる時、より大なる愛の爲、比較的小なる愛が没却せられたるか、或は愛の價値が

共棲の利益以下なる理由を見出す理性の働きによれるが、いづれにしても、情交に對して愛なき理にてはなく、若し社會と經濟が許すならば、鶏の如く、十數の子女に生涯自己の愛を分ち得るものや、も知れ難し、して見れば、人類も愛なき生殖はせざるものなり。

以上の如き人類の心理に對しても、本論の立場より見れば、大に理由有る事なり。且つ人類の本能が、昆虫の本能と如何に異なるかを考研する一大好資料となるものにして、吾人、人類の究めざる可からざる問題なりとす。

兎に角此種の本能が、外見何等豫備なく行はるゝ如きも、他の本能に比較して、割合に、愛てふ永き時間を領する豫備の必要な事は、何如なる衝動的交尾遂行に有りても、等しく愛の豫備を要する事は、一定の方式にして一瞬の交尾快感によりてのみ、交尾は遂行せられざる筈なり。

然し、世間には往々此方式の逆を道理の如く思はしむる事多く、若しくは交尾の快感を得る爲に、一時的偽愛を豫備する場合、即豫備的愛を1とせずして0となし、0—1—1なる實例多し。然らば、昆虫の如き下等生物にありては、等しく交尾感に誘導せられたる交尾遂行なりや、と云ふに、然らず、昆虫に有りては、既に述べたる如く、生殖が自己の破滅なる如く、彼に取りては、生殖は人類の生殖以上價值有る、而も一生の生活より得たる此世の快樂を、彼れが愛する雌虫に捧げて、贖はんとする生殖は、實に一編の聖詩で有る、少しの踏みも誕みもなき、清淨無垢なるものなり。されば昆虫の生殖は、交尾が直ちに生殖となり、人類等の如く、交尾の爲の交尾なき所以にして、従つて愛の豫備なき衝動的野合は極めて少なきものなり。

以上の結論よりして、直ちに、生殖は交尾快に誘致せられたるものに非らずして、異性愛の極致なりと断定し得、而して、逆方式によれる状態、及び偽愛豫備の状態を病的交尾となす可きものなり。昆虫は交尾によりて自己破滅を來すも、即座に死滅するものは少なく、多くは餘日を有するものとす。其如何にして自己破滅の経路を辿るやと云ふに、本能の論據によれば斯く断定せざる可からず。即ち昆虫が成虫となり、花の香や、草の露や、周囲の慰藉によりて生の快樂に沈溺して居つたる、彼等の生の幸福即ち彼等の保てる自己の母精の満足が、最早是等の事狀によりて満足を感ぜざる如くなり、異性相識となり、茲に初めて、生の深みに到達し愛となり、交尾となる、此交尾は前述の如く聴覺により腹方部に移動せられ、或は直ちに生殖部の發育により腹方部に移集せられたる、母精の知覺により、生殖

部に極度の知覺を生じ、交尾の際、雌体に精液の媒助によりて移精するを以て、生殖後の昆虫雄体は、少なからず生殖前に置けるよりも、疲労し、遂に死期に入る物なり。故に生殖は先づ自己發育により、母精の知覺が完成するに始まるものとす。

昆虫は交尾により、自己の母精を雌虫に移殖するを以て、雄虫は交尾遂行毎に自己のエネルギーの泉源たる精を、減少するを以て、其虫の勢力は、生殖の度毎に減少し、常に活動的なる虫も、秋の末頃には頗る不活潑なる状態に落入り、遂に死に至るものなり。尙死に至らざる者も、僅かに自己の濕氣を放散せしめざる程度に、生命の繼續をなすに留まり、多くは冬眠状態中、冬季の乾きたる外氣に堪へ難くして、枯死するを常とす。昆虫の中蠅の如き繁殖力の旺盛なるものは、勿論生殖力も盛にして、其

生殖後を見るに、敢て生殖前に何等異なる事なく、不斷に活動するものなり。思ふに生殖力は自己の回収したる母精の多寡に比例するものにして、(高等動物は母精の残存力即ち執着心に比例すとは雖へ)母精の生存する間は生殖力を保存し得るものなりとす。

蠅取蜘蛛の生殖後の愛に就て色々實驗したる事あり。四月頃なりと覺ゆ、障子の中程の格子の方隅に、二重に美しく敷き詰められたる蜘蛛の巢の敷物とも云ふべき、又布圍とも見る可き巢の中に——下敷き巢布圍は障子の棧に密着させず、少し浮き張になりたる物と、着布圍とも見る可き上綱との真中に、大きな灰黒色に紋入りの、雌蜘蛛這入り居るを見たり。翌日に至るも動かざりければ、初めて巢籠りたる事を知りたり。さるにても、冬眠にてもなければ、食事には出する可き物と思ひたるに、毎日出歩

く様にもなく、依然として籠り居たり。或る日、漸く雄蜘蛛が見張り居るを見れば食餌を雄蜘蛛が運び来る物ならんと思ひ居たるが、更に食餌を與ふる氣色はなく、毎日／＼同様に只不動の雌と、見守る雄虫とにて、何の變化も見出さざりければ、特更に蠅を取り來りて巢の口に入れ置きたるに何時の間にか雌蜘蛛がのそ／＼動き出して、前肢にて、もぞ／＼して居る間に蠅は外に突き出されたり。今度は生きたる蠅を羽根だけ取り除き、突入れたるに、等しく雌蜘蛛は腹立たし氣に、前肢にて突き出したり。其間雄蜘蛛ははら／＼して、巢の周圍約一尺の半徑を以て、ぐる／＼警戒し居たるが、蠅を突き入る爲、可なり巢の張り絲をも損じ、且指にては都合悪しければ、ペンの先や、マッチの棒などにて突き入れなぞして居たるが、更に雄蜘蛛の反抗をも見ず、却て、雄蜘蛛は遠巻きに周圍を巡り居たり。

其翌日、都合よく、同じく蠅取蜘蛛一匹、次の障子に這ひ居るを見出しければ、好機逸す可からずとばかり、傷付けぬ如引捕らへて、以前の巢の前に放ち置きたり。然るに是は雌蜘蛛なりけるが、蜘蛛の事とて、別段に蜘蛛の巢籠り居るを認めたりとて、不可思議に思ふ理もなく、さつさと己れの心の向まゝに立去らんとする様子なりければ、ペンの先にて彼女の進路を妨害して、成可く、蜘蛛の巢の中へ追ひ入るる如、極力勉めけるが、中々思ふ如に行かず、ほどく當惑したり。暫らくいがみ合ひたる後、漸く籠巢の前一時位の所に立往生の態に至らしめたり。先づしめたり、結果如何と堅唾を飲んで眺め居たるに、護衛の任に有る雄蜘蛛と、二三時の所にてすれ違ひても、何等兩者の交渉を引きさざりき。かくては何の功なしと、例の荒手段にて、漸く手込めにし、籠り巢の中へ押し入れたたり。されど、

矢張り中の雌蜘蛛に追ひ出されて、何の手答もなし。殆ど手を盡し果したる感有りしが、更に勇を鼓して、今一度前手段によりて、其蜘蛛を否應なしに巢の中に往生せしめ、稍々暫く手を束ねて結果を見て有りしが、中の雌蜘蛛も共に異様の出来事に驚きしならん、今度は何の手出しもなく、じつと身構えたるのみなりける。突き入れられたる蜘蛛は、勿論恐怖の餘り只縮み上りしものならん。身動もせずありけるが、そこが虫の事とて、間もなく今の恐ろしさも打忘れたらん如く、生き心ちに成りたらん如く、もじく動き初めぬ。巢籠の蜘蛛も、此蜘蛛の動き初めたるに、今更氣付きたらん如く、妬ましげに怒り出しぬ。此蜘蛛も蒼皇として這ひ出すかと思ひ居たるに、豫期に反して、反て稍反抗的態度に出で、初めて茲に自然の此虫等の對持的磁氣を出顯したり。先づ之れで締めたと思つて見つめ居た

りしが、此状態も永くはなく、此蜘蛛は少しづつ、後ずさりして、巢の口に立ち出でたり。巢籠中の雌蜘蛛は、益々猛り狂ひ出し、今にも巢を破つて飛び出さんず氣配なりけるが、さるにてもなく、只狭まきはさまつたる巢の中に、妬ましげに動くのみにて有りける。外に其成行き如何やとおごおごし居たる雄蜘蛛は、此蜘蛛の動くにつれ、巢を遠ざかるに連れ、同じ距離を隔て、追ふが如く、怒るが如く、随ひ行けり。稍一尺位來りたる頃より、ふと出來心にても出たらん如く、前肢を横に開き、寧ろ媚るが如く追従し行くなり。此蜘蛛は半ば雄蜘蛛を追ひ返したきかの如く、時々逆に雄蜘蛛に迫り、雄蜘蛛退り、雌蜘蛛行き、雄蜘蛛従ひ、殆んど一間程も來りたれば、我最愛の妻を護衛する爲、外來者を追ひ除くるなれば、此位にて善かりさうに思ひけるが、更に雄蜘蛛は歸り行く氣はひなく、時々此蜘蛛

に飛び重なりなぞして挑み行き、果途なし。此蜘蛛も等しく、もて餘したりしならん、障子の裏に廻り、雄蜘蛛の來らざる間に屋根に飛び降り、何處ともなく逃げ失せたり。雄蜘蛛は、勿焉として失ひし相手を求めて、怨然たる様子なりけるが、尙留まらず、其周圍を幾回ともなく尋ね居たりしなり。此雄蜘蛛は如何にしても怒りしにてはなく、途中にて出來心が出來、異なれる雌虫の爲、一寸妊娠して不様な妻の事を打忘れたる如にて、如何に蜘蛛は生殖後に於ても、尙生殖機能の殘存程度の強きかを知る可し。其後二日程の間、雄蜘蛛は如何にしたりしか、少しも形を見せざりしが、丁度四日目の朝初めて氣が付いて巢を改め見たるに、不思議や、二重張になり居る巢の下に、即ち雌蜘蛛の狭まりて居る下の布團の下に何やら蜘蛛

の脱け殻の如き物有り、何ならんか、雌蜘蛛の食餌となれる虫の残骸か、或は雌蜘蛛の脱衣か、さりとして、敷布團一重隔てて、皮を脱ぎ棄て如もなく、又食餌としても障子の棧に殆ど密著したる敷布團を、むくし上げて、餌を入れ、其上より、雌が食したるとしては、雌蜘蛛の籠つて居る巢の口が雌蜘蛛よりも小さいのに、之から雌蜘蛛が出て、獨りで此仕事をなしたとしては、不活潑なる妊娠蜘蛛の手際として、如何にも受け取れぬ。雄蜘蛛は交尾遂行後、雌蜘蛛の食餌となることは聞き及びたるが、さては、雌虫の犠牲となりたるか、と氣付き、團扇の骨を一本取りて、無理やりに引き出して見たるに、果せるかな、以前の雄蜘蛛にまがう方なき、腹背部に一本の通つたる、白き、且太き線を以てる、残骸にてありき。此凶行は何時行はれたるか、少しも手係なきも、残骸が殆ど脱殻かどまがふ位乾燥し居る所

を見れば、少なくとも、二日位前の夜間に行はれたるらしく、さりとして、此狭ま苦しき下布團の下に這込みたるは、かねて覺悟の事と云ふ事は、述ぶる迄もなき事なり。今此慘事を測面的に觀側せんに、先づ第一に、雌虫の嫉妬により、雄虫は食ひ盡されしか、さりとして、わざ／＼雄虫が雌虫の眞下に這ひり込んで、生血を吸れたるは、不可思議なり。此現像こそ、或學者は以て前説を主張する者も有れど、それは餘りに皮相にて、より以上復雜、且神秘なる眞理の伏在を物語る物にして、只雌蜘蛛の嫉妬とのみ云ひ難きは明かなり。「何故に雌蜘蛛は食はれたるか、」は本論に於て見逃す可からざる好資料にして、吾人の常に要求する前述の難問題、「生殖は自己保存か、種族保存か、自利か、利他か、」の根本問題を解決す可き物なり。情慾の遂行を以て、自利的とし、或は高等なる生物に於ける老後の呂伴た

らしむべき欲望の満足等、を利己的とし、生殖によりて、益々元氣の旺盛なる、若返り民族を見て、自己保存とし、自己を生殖によりて破解し、子孫を産出せしむる昆虫を見て、種族保存とするも、等しく半可通の臆断に過ぎず。従つて隣接して、而も何等交渉なき、無縁の臆説が濫出する所以にして、徒らに理論を錯綜ならしめ、而も事實を曲避せしむる所以なり。そも何如なる點に其欠所を歸するやと云ふに、生殖を以て利己、或は自己保存とするも、種族保存とするも、等しく、其主体にして、不徹底ならんには、遂に其結果や、不確實なるは常に真理なり、昆虫或は他生物其自体を捕えて、直に主体として論ずるは既に誤解にして、遂に深遠なる真理に入り難き所以にして、一般的學者の謬見として極力排除せんとするは余の持論なり。

爾來思辨心理學より進んで、近代は主として經驗心理の甚大なる進歩を見心理學上の諸問題に對する一般的能率を増進したるも、尙學者の理論に於て常に盡し難き不到の領域の見出さるゝは、真理の爲め遺憾なり、苟も學問の權威として論ず可んば、常に徹底的なるを要す。云ひ盡す可くんば、云ひ盡さざる可からず。一面を隠して、任意の假空に立論し、滔々として百萬言を費したりと假定するも、一片の真理も含まず、若しくは其根本に於て錯誤あらしめば、遂に片言の真理にだに過ぎざらん。斯く心理學も多少近き將來に對する學術としては、最早稚氣有るを如何せん、其欠所を衝いて表現せんとするものは、常に靈理學なり。此靈理てふ古き思潮の來襲に對しては、常に抑壓的なるよりも、寧ろ調和に有り。然り、赤裸々なる調和の上に眞文明を建設せん事が、目下の急務なり。

本論は常に昆虫の精を「たましい」と讀み、全編を通じて此昆虫の精を昆虫の主体として論じたる如く、生殖を論ずるに有りても、等しく此精、— 虫の母精を、各自の主体として論ずるものなり。

先づ前述の如く、人類を主として論ずる時は、生殖を自己利益と做し得るも、昆虫に有りては生殖が直に生の破綻となり、一見利己的ならざる如きも、母精を主体として論ずる時は、母精の生殖快によれる満足は、即ち自己の利益を主として、生殖を行ひたるなり。故に本論よりする時は、生殖は母精の利己的本能なり、と結論し得るなり。

然らば、種族保存は如何、勿論生殖は種族を繁盛ならしむるものなれば、種族保存には異なりなきも、本編の立脚地より論ずれば、前述の利己的本能たる結論に何等矛盾する點を認めず。何となれば、今此雄蜘蛛の雌蜘蛛

に食ひ盡されたる事實に就て觀察せんに、何故に雄虫は平常雌蜘蛛を護衛するに巢の外部のみに居り、外圍の敵に備ふるに、其時に限りわざ／＼這入れもせぬ、下敷布團の下に這ひり込み、此無慘たる雌蜘蛛の吸血に堪へ得るや、少なくとも、何と思つてじつとして此悲惨事に面し、眠れる如く死に付けるや、こは雄虫の觀念こそ、即ち生殖後、比較的多く殘存せる母精等の心理にして、雄蜘蛛其れ自体は、只假りの宿体に留まり、此慘忍なる出來事に對して、恰も催眠状態に於ける出來事と等しく、何等苦痛を感せず、只半無意識に母精の示命により、わざ／＼雌虫の眞下に潛り、雌蜘蛛の恐ろしき毒牙が下布團を通し、自己の体内にざくつと突き通り、吸管を通じて、生血を皆吸ひ取らるる迄、身動きもせで最愛の妻の犠牲となれるなるが、如何に變態なる心理に有りとするも、只愛の犠牲となる爲丈に

ては理解し難き出来事なり。故に、本論の主張する如く、其虫の母精を主体として考研せざる可からず。

此母精は、永き生活に因て稍硬化して、餘生なき、老朽したる宿体を棄て、新生を産出せしめ、餘生永き幼虫を宿体とせん慾望の満足を果さん爲、生殖の際、取残されたる母精は、全部老雄虫の全血液を雌虫に吸収せしめて、名残なく、雌虫の体に移殖し、纏て新生により抔乎として盡きざるの快樂に、あらゆる欲望を満さんとするなり。

昆虫の母精を主体とする時に、初て吾人が到達せんと欲して得ざりし彼岸に立ち到る事が出来るので有つて、幾百の議論も、其主体てふ追分に於て進路を誤つて居た事を、見出し得るものなり。

物質的科學の旺盛なる過渡期時代に入りて以來、萬事物質的學理の説明に

眩惑せられて、往々數千年來、折角云ひ傳へられたる絶体的眞理も、暗黒の戸棚に投込められて、何等文化てふ光明の威力によりて審議せらるゝ事もなく、敢て古き機械が、新進の機械に押のけられて、再び顧る者なき如き、状態に落ち入れるも、決して、排除せられたる機械其れ自身は、或は陳腐なる者なるやも知れ難けれども、物質其れ自身は、絶体的に價値を否定せらるる必要なきと同一に、所謂陳腐なるものも、理其れ自体が滅却した物にてはなく、要するに、表出の陳腐、或は便宜的排除で有つて、永久的滅却にてはなき者なり。されば、物質的學理の窮極に於て、何物かを要求する秋に於て、再び暗黒の戸棚の中は光明の思索によつて撫でらるるならん。然し、古き構造に因て、一度忌避せられたる憐れなる古き形骸は、生温き現代人の手によつて、新らしき鑄型に入れて、新らしき生命を、現

代の新舞台しんぶたいに現はし、本來の使命しうたいていの澁滯しうたいていを、再び忘れ去る時が来る可べきは、頗すこぶる疑問ぎもんとせざる可からず。物質文明は、靈的啓蒙時代さんがいの殘骸ざんがいに、不満足を感じたる。渾沌こんどんたる若悶くもんの絶叫けつけうによりて、産出せられたる實在の一半面なるを以て、只物質科學ぶつ質科学てふ、一半を得て、他の一半を顧かへりみざるは、等しく一半を得て一半を失ふなり。

故に質物文明しつぶつ文明の窮極きうきよくも等しく、渾沌こんどんたる不滿の境に沈淪ちんりんして、他の一半を渴仰かつげうするに至らざる可からず。

余は文質的文化の結晶けつしょうとのみ信じて居たる米國に、十數星霜を過したるものなるが、其間只自己の豫期を裏切りたる物は、靈性に對する米國民の信念なりとす。

彼等は幼少よりして、朝夕事に觸れ、物に觸れ、不滅の靈性に對して、自

己を告白し、懺悔ざんげし、尙未來の進路に對して、過失なき事を希求しつゝ、有る美しき彼等の信念に接して、我が國の先覺者なる者の、往々にして只物質のみを見て、敢て靈性を問はざる者多きを見、轉うたた愁眉しうめいを閉ざさざるを得えざるなり。

余は唯に、宗教家の説く如き、物質の榮達を棄て、精心的生命よみかへに蘇よみがへれと絶叫する意味のみにてはなく、物質的説明のみに偏したる學究より蘇生せよ、嘗かつて弊履へいりの如く忘れたる一半を、今一度暗黒の片隅より呼起せ、然して出來得る限り、物質的文明の欠所を補足せよと望むものなり。

昔は子孫を産出せしむる業は、唯に神慮によるものと深く信じて疑はざる程ほど、純白しゆんぱくなる者ものなりしが、近代に至るにつれて、生殖の業は下降かこうし、物質化し、或は生殖が商品ともなり、玩具ともなり、或あるはサンガの如き人爲

的人口の調節者の迎合せらるる丈、其れ丈、科學的生殖の見地も、遠く神慮を度外したる事は申までもなし。さりどて、サンガー女史は米國の教育によれる産出物なり。され共、此一事を推して以て、米國の思潮を即斷する譯には參らず。近代殊にデマゴギユの手段は、或は彼等の信する所を裏切つたる表出を敢てし、自己の取らざる所を、人に別つて以て得たり賢しとし、或は一弄世者の捻出によりて、奇驕者を一夜作りし、後進國を誤らんとする事實なきを保し難し、只吾人は廣濶なる襟度を以て、總てを抱擁して以て、其中に不變性を見出さざる可からず。

昆虫の生殖は前述の如く、等しく母精の自己満足によれる物なるを以て、種族の保存の如きは、直接なる目的に非らざるなり。然れども、現時の仔虫も、死後何時の時代にか再び母精として仔虫を構成し、教養する任に當

り、斯くして、幾代か幾代かの末、彼等の種族は益々繁殖し、彼等の精は益々其相互の關係を増大し、其れ丈、彼等の文明も増進し行く者と考ふる時は、終局の目的は等しく、種族保存に歸せざるべからざる如し。されども、假に人類の社會に有りとするも、幾十萬年乃至は幾百、幾千萬年の昔、全知全能なる絶大の神性の出現によりて、此地球も創生せられ、大にしては聖靈の發生、人類の相互的日常の出來事より、小にしては昆虫、或は最下等の原始的細菌類の動靜まで、幾百、乃至は幾千萬年前に、現存したる絶大無邊なる、唯一の神の攝理に出でたりとは信じ難し。況んや、昆虫の如き、種族保存を終局の目的なりと獨斷し在る程、神秘なるものならず。人類の如きも、靈性の増加が進歩を生み、進歩が增加を生じ、絶えず神性は移動し、増大し行きつつ有る事は、人類社會の文化の程度によりて測定

し得るものの如く、吾人、多神教徒の頭腦を以て考ふる時は唯一神教徒の信念に、疑議を差しはさまざるを得ざる次第なり。但し靈の衆合點、或は衆合力を、特に神なりとの抽象的名稱を附するなれば、然るにても理解はし得らるるものなり。或は理性と稱し、胎臟的法心に歸するも、等しく靈性の合成力を意味するものにして、敢て失天性なりと証明したるものにてもなく、原始時代を最文化の時代なりてふ、觀念を與ふるものにても非らず、等しく推移し、進化して休まざる、後天性の神性を物語るものなり。人類に有りてすらも、等しく昆虫に於て與へたる結論の如く、生殖は種族保存に有りてふ意義が、先天的に存在したるものにてはなく、終局に於て、生殖は只母精の自己満足を目的とし、種族保存の如きは、最高なる生物に有りても、自己満足に對する補足的第二義の目的として、後天的に發生し

たるものなり、と斷言するに憚らざるなり。然らば、母精の自己満足によれる生殖は、交尾快を主とす可きならんかと云ふに、人類の如き高等なる動物に有りても尙、強ち否定はなし難き者有り。人類は總て所要の子孫を得て、直ちに生殖欲を禁すべき譯にてもなく、又交接が昆虫に於ける如き、明確なる破解を意味せず、反て生理的發育を補助する實例有り、一様の説明を附し得ざる物なり。余は通例の人に比して、比較的生殖欲を禁壓し來りたる一人なるも、生殖欲を絶体に神聖視せんと欲する理想に生くる一人にて、生殖によりて肉体は完成し、人格は完備するものなる事を深堪に考ふるに至れり。古への聖者等の禁生殖欲等の感念は、如何なる意義を以つ者なりや、測り知らざるも、少なくとも微細動物より人類、將亦草木の類に至る迄、生殖の氣に浸潤し居る時に何

を苦しんでか此大氣に對抗し、此種の重力を禁避する必要を生ずるかを常に思はざるを得ざるなり。

然らば、昆虫にも差すべき所謂愛なき病的交尾をも許容す可きや、と云ふに、複雑なる關係を有する人類に有りては、種々なる接衝の後、一定の歸着點を合議的に求め得て、此種の變態的行爲に對して禁壓する方法を生ずるに至りたるを以て、明白に一個の意志に對しては、絶体の自由を許容し得ざるものの如く、常に吾人は其合成的靈性に一致したる母精の示名に従順なる義務を有するものにて、絶体的意義を希求するも、得る事稀れなるものなりとす。精を魂と解釋し、精の合成力を神とし、昆虫には昆虫の社會を統御する靈性を構成し、馬には馬の統一的靈性を生じ、彼等社會に必要な文化の生命を永久に繼續し、其種族の繁榮、衰退、により、彼等社會

の靈性は強大となり、或は微弱となる、従つて永き時代を通じて、退化する種族よりは、特種の場合を除くの外進化するものの力、其種族の生殖力は旺盛となり、子孫は膨大し、彼等社會の生命の過程は複雑となり、一般的本能の進化となる理なり。

されば高等動物に進むに連れて、生殖的本能は、必然的に強大となり行くべき理なるも、實際的に有りては、他種族及び自然界の變遷等の原因により、常に生殖力と、彼等個々種族の繁榮とは一致せざるも、繁殖力の旺盛なるものは生殖力強く、生殖力旺盛なるものは、一般的に進化すべき者なる事は論を待たず、彼の廢殘の種族が、只淫行の快樂に沈醉して、敢て彼等の祖を顧みざる者を指して以て、好淫は廢者の特權と做し、昆虫は死を前にして生殖し、竹は種族の廢滅に先つて花を生ずる、等を引証して生殖

と其種族との關係を論せんとする論者も有らん。然れども、繁盛なる種族は、一般的に生殖力強大にして、個人に置いて見るも、福者、權威者の畜妾等、否定すべからざる實例乏しからず。

嘗て共生する虫と、孤獨に生存する虫、との間に於ける生活状態の差異に就て一言したる事有る如く、彼等の社會に各統一的靈性を生ず可き事は想像し得べく、靈性と、生殖本能との、關係を推理する時に、吾人は如何に生殖欲の神秘にして神聖なるかを知得し得べし。

さればこそ歐米と云はず、我國にても、當今性學研究隆盛となり、生殖に對する吾人の迷夢を轟しつゝ有るは、一大社會の進歩と見るべく、生殖神の崇敬を復活せんとするに至て、眞に一大宗教の堂奥に到達したるものと做すべし。尙過渡期の尾圈を脱せざる危季に有るも、早晚全世界の宗教界

に、一大變遷を醸生すべく、然る時に、吾人は方便的虚偽の社會を解脱して、天真の樂土を全地球の表面に建設する時を近き將來に豫想し得べし。通常昆虫類は生殖を終了して間もなく死するものにして、前述の通り、母精の知覺が成熟し、春の花、夏の青葉に輝く露の味にも倦き木々の葉末が色を變する頃に至り、老生に近きたる、彼等の宿体たる老虫の運命も定り來るべき秋の霜、或は冬の枯嵐に吹き氷らさるる萬象を豫知する時、彼等の觀樂の夢は何時の間にか悲哀の音に變り行き、彼等の若き希望は、桐の葉づれの其れの如き無味悵々たる不安と變り果て、彼等は如何にして、永遠につきざる自己満足の意志を遂行し得んとするか、先づ春の花、夏の若草はなくとも、差當り彼等が宿体を保存すべき暖かき葉蔭もなく、氷らぬ露もなき恐ろしき冬枯の日は、彼等に取りて如何につれなき恐怖ならん

かは、實に想像するだに憐れなり。されば彼等は彼等自身の宿体を如何に保存すべきか、保存し安き方法に因て保存せざる可からず。然り保存すべきとして、如何なる方法を撰ぶべきか、彼等の或る者は盛夏の炎熱をも厭はず、彼等が蓄へ置きたる粒々辛苦の結晶たる、嫋々たる細き織緯を繰り出して、氣なげにも、外套の如き、家の如き、繭を造り、尙其れにても不足なる故、冬の寒き乾燥したる外氣に抗するべく、仔虫の外皮を厚化し、外面積を縮少し、然して後、絲を以て全身を掩護するも有り、泥土を以て防寒に備ふるあり、木汁、木臘を以て圍むあり、其他種々なる方法を以て、彼等の文化の興へあるまゝに巧みに、冬眠に入り、酷烈なる冬の神の惡戯を避く、恰も彼の子女が霹靂たる電雷の恐怖より失神せんばかりに已を虚うし、或は老母が強震の慘事を忘れんとして、夜具にくるまつて假睡する如

きものなるべし。或は彼等の冬に對する恐怖は、恐らく其れ以上なるべし、如何となれば、此防備なくして唯、一つなりとも生存は期しがたければなり。尙如何にしても彼等の全能をして保存の意味を見出し難き時、彼等の不安と悲哀や如何なる可き、彼等は遂に涙を振つて、終生を誓ひたりし、最愛の宿体をして破却せざる可からず。さりて彼等母精に取りては、有機体を失ふては、一瞬も確實に存在し難きを以て、哀れ彼等の取る可き最後の手段や如何、他なし唯生殖の一途あるのみ、彼等は生殖に因りて、雌体の卵子と精子との結合体を作出し、此新有機体に附着し、外界に産出せられ、比較的無感覺なる此卵を保存する事により、辛じて彼等母精は再び季を見て彼等の新らりき満足を遂行せんとするものなり。

以上の理論より推理する時は、自から生殖と生命との關係を知得する事を

得べし。生殖によりて生命を短縮すると解するものと、生殖は個体を完成し、尙且長き生存欲を増すものと論ずるものとの間に、介在する矛盾を容易に説明する事を得べし。前者は一般昆虫の如き、死期を前にして生殖し、生殖を終了すると同時に、冬眠中大抵は冬死するものなるを擧ぐ、尙適切なる實例として、常に米國等の平原に發育する蟬を引出して説明を附するものを見るに、此蟬は幼虫時代は焼土の如き細かき土中に深く生存し、僅かに表面に開けたる小孔を通じて呼吸するのみにて、別に樂む事もなく、十六、七年の長年月を過し、老成して羽化し、間もなく生殖し、直ちに雄は死し、雌も亦産卵後等しく死するものなれば、論者は生殖を以て個体破壊と絶叫するに至れり。他の昆虫に於ても、亦生殖前の生期と、生殖後の生期と、を比較する時は、三、四の例外を除きては大方論者の説を証せざ

るはなし。又後者に有りては多く、哺乳動物を主体として論究するを便なりと認む、殊に人類に有りては、早きは十二、三才にて既に交接機管發育し、十七八才にして嫁したりとするも、尙生殖後二倍以上三四倍の長壽を保ち得るを以て、直ちに生殖を以て個体破壊を意味する事困難なり。此論者は或は發春期に於ける家畜を絶体に監禁し置く事に因て、反て彼等の壽を短縮する實証を擧ぐる等、種々各自の論議の好材料を列擧するに忠實なる如し。然しながら、生殖とは一般的、普遍的の義にして、特殊の實例に偏して説明し得べきものならず。さればとて、幾多の生物の中各其特長を異にし、各自生殖の一生涯に於ける時期を異にするを以て、急に生殖は自体破解なりとも、否保存なりとも、云ひ難きは見安き理なり。其は前に述べし如く、生命其れ自身の解釋が不徹底にして、只物質的、形而下的學

理のみを固執する現代癡に因りて、既に其根本義を没却し居るなるが故に、議論は唯に一片の辞文に過ぎずして、生命を失へるもの也。

讀者は既に生命の實現を以て、各自の母精の自己満足遂行に有る事を修得したり。されば、生殖と壽との關係に就て見るべし。生殖の自体保存とすも、自体破滅とするも、等しく、其主体なる母精の自己保存、否自己満足の遂行上、外界の情況との交渉に就て、考究せざれば、生命と生殖との關係を考ふ事不可能なり。又母精の自己満足の遂行と、外界との關係は、生物各々異なるを以て、一々實際に就て研究する事は不可能なり。されど同時に、吾人は直に結論に突入する事の最も容易なる事を知り得べし。曰く、如何なる生物と雖も、周圍の情況の許す限り、即ち抵抗力を有する限り、

尙詳細なる云ひ廻しを要求するならば、各自の母精が、其有機体を以て、外圍の迫害に對抗し得る間は、現存の情況に、何等變更を與へず、各自の満足を繼續する事を以て彼等自体の満足の最大要素と考ふるものなり。彼等にして、一朝外界の迫害に對して、如何にしても對抗する事不可能なる事を知覺したる時、出來得る限り、外界の事情に順應せん事を勉むるものなり。即ち昆虫の變達發生の如き、人類の文明の如き、皆等しく外界順應の一策と見るべし。然れども、彼等にして如何にしても現在の個体を以て外圍の情況に對抗する事の出來ざる事を知覺したる時、最後の手段として、現在の有機個体を放棄せざるのやむなきに至る。此時に於て、只彼等にして自己の機管をむやみに放棄したるのみならんには、如何に成熟したる母精に有りても、尙有機体の補助なくして、完全なる存在の知覺を確認し、

十分なる満足を得得する事不可能なるを以て、自然的要求として、現存の機体に換ゆるべき新機体にして、而も、現下の難局に適應したるものを作らせざるべからず。然る時に、彼等の要求に適應したる作出法として、生殖が撰ばれたるものなり。生殖を以て、個体破滅と一致する生物、即ち昆虫類一般。他は外界の情況に對して、特久的に、或は順應し、遁避するに よりて、生存し得る者に有りては、生殖を最後の手段とせずして、持續的快樂の一機能となし了し、得々たるもの、即ち昆虫に有りては、蟻の如きもの、稍高等なる脊椎動物、人類等にして、生殖が生涯を通じて反復され、尙且新生増殖以外に快樂の一手段として弄せらるるに至れる人類の如き最も文化したるものに有りては、最も巧妙に外圍の情況に順應するのみならず、又一面外界の事物を自己の便宜に供し、或は外界の一部を征服し、自

己に都合よく順化せしめて以て、自己満足の持續を敢てするもの有り。後者は反て生殖欲によりて母精の満足を助長するを以て、生殖欲旺盛なるものは母精の生存欲、詳言すれば現個体の保存欲を増加せしむるを以て、益々人類は、一般より見る時は、生殖によりて壽命を永くする傾向を呈するものなり。されば、生殖は、現存の生物界に示され有る如く、一般的に、生殖によりて生命を保存するものにもなく、又一般的に生命を破滅するものにもなし。

物質的論者は、精液は貴重なる生命の一部分なれば、毎生殖に漏出するは、即ち生命の幾分を失ふなり。されば生殖によつて、生命の部分を損消するとせば、自体保存の意義に相反するに非ずやと、實に一應肯へざる可からず。故に勿論生殖の過度なるは生命保存の意義に適應する者に非ら

す。然し乍ら、適度の生殖は、寧ろ必要なる物なり。如何となれば、精液は恰も花粉に相當する物にして、一度草木の一精分より花粉を構成したる後、如何に花粉を保存すればとて、或は花より其れを取り去りたりとて、さして其草木の生命に關係する事なきと同一理由により、自然的、生理的に、精液の補充能力に應じて、適度に新陳交代せしむるは合理的にして、婦女子に於ける、グラーフ氏胞の自然破裂によりて、排卵作用有ると同一理由により、男子も絶体的に精液を保存する事も、亦不合理なり。草木等の如きは、開花に際して果實を結ばしむるよりも、寧ろ花を摘み捨つる方、反て其草木の利益となる事有る如く、交接によりて適度に精液を漏出せしむる事は、寧ろ個体保存の意義に適するものと見て差支へなき如なり。扱て茲に、本論と一般論者との間に、氷炭相入れざる確執を拒むべからざ

る問題を惹起し來るは、生殖に當つて男子の精子が、卵子に向つて突入し、混を生じたりとせんに、其混は輸卵管の收縮運動によりて、子宮内に運ばれ、子宮内にて發育し、子となり、分娩期に於て母體より分離し、哺育、學校教育、社會教育によりて、一人前の人間となり、相當の年齢に達して迎妻し、兒女を産出せしめ、老年に至りて死すと假定せよ、然る時に、此人間は精虫の蠢動力に初まり、漸時發育に連れて、活動量を増加し、嗚咽、肢足の腕き、匍匐、惡戯、社會活動等に至る激務、及び精心活動をなすに十分なる生物となりたりと、云ふ。若し論者にして人類の靈魂を信じ、靈は不滅なりと理解せりとせんか、人靈は精子と卵子との結合に因りて産出せらると信ず、最も普通の信念にして其結果に於て眞なり、然れども本論に於ては其根本、及び其經路に於て少なからず異とするものにして、或は

本論をして餘りに附會ふかいなりてふ反對の言を聞きやも計り知るべからず。然し、本論の立場たちばとして、根本的に所信を述べざる可からず。本論者は既に生物は皆、他論者の所謂先天性となしたる所を、母精の知覺反應はんおうちなり、と力説したり。故に幼生に取りては、先天性なるもの絶体ぜつたいになく、皆後天的に教育せられつゝ有るものにして、本論の立場よりすれば人間も否人間も他生物と等しく、仲介的教育ちゅうかいてき、即ち家庭教育、學校教育、等の人爲的教育なくとも、生命の過程くわていを完全に遂行し得べきものなり、と論ずるものなり。其人爲的教育なる物は、然る時に何を意味するやの問とひに對しては、只無限の時間中より、僅わずかに一小時間の進行の速度を早めたる丈の功力有るのみにして、大宇宙に取りて、將亦無制限むせいげんなる時間の延長に對して、何等交渉なき努力どりよくに等しき物なり。人爲的教育じんぬてき、擴張かくちようして云へば所謂文化は、強請

的即ちインペラチブならずとも、何時の時代にか當然到達すべきものにして、云はゞ現代殊ことに近代の文化なる物は氣短者きだかものの文化なりと云はざる可からず。然し現代人に取りては、此上もなき幸福と云はざるべからず。無線電信、電話、或は活動寫眞、飛行機等を知らずに生存するよりは、何もかも厚生こうせいの器とせられ有る事は、如何に誇りなるかは論を待たず。

生 活 力

母精の不満足、不快なる情調によりて、病氣の或部分は醸生じようせいせらるる事は、貧者の例に於て最も明白なる如しとするも、大厦高樓たいやこうろうに座し、酒池肉林に飽きたる富者、或は雲龍騷々たる權威者けんぬしやの扱てまゝならぬ病氣の苦痛

を、此場合に於て如何に解釋すべきか、最も上述の如く病は唯に精心的方面のみより來るべき物ならざれば、さるにてもよし、宗教家は茲が付目にて、ソロモンの榮華も何かせん、只野に咲く白百合の美しさに歸れよと、説き出さるる、浮世の矛盾を如何に解釋すべきか、不可解なる謎は更に不可解に、宛然五里霧中に彷徨するの感有るなり。然し、彼等の病氣にして、眞實精心作用より來れるものなりせば、其理由は如何に錯綜し居るとするも、常に彼等の母精等の不快、不満足に歸因したる事は逆睹し難く、其不快、不満足なる物にして、如何なる理由に出でたるかを研究すべき事は、恰も不可解なる此未開の金庫を處理するに對して、先づ鍵を撰擇すると何等撰ぶ所なき物なり。

貧者の不快は、十中の八、九迄は物資の欠乏より來るは事實なる如し。反

對に富者、權者の不快、不満は、不飽性物質慾、即ち或る意味の欠乏より來るものにして、等しく貧者の母精の場合と共通なる事多き如きも、或る特種の場合に有りては、充實、若しくは、過剰したる物資が反て禍ひする事多き如にて、彼等の母精は是等の眩惑すべき物質の權威と、絶体の自由とにより害せられて、遂に永久の幸を保証したる彼等の宿體を、何時とはなく破解し初むるに至る、何故に彼等母精は斯の如き幸福に對して、不快と不満足とを産出するやと云ふに、宗教家、道學者は、其は物質が萬能ならざればなりと、即答するならんも、實際に有りては、精心的に母精の満足を得るものより、以上に物質によりて、吾人は満足を経験し居る事實を以て、直ちに、而も心のごん底より、「然りと肯定する者は學校を離れて當分の中位の者なり。恰も、満足の尺度の如く、人類に附與せられ有る物質

は、必らずしも宗教家の説く如く、神意より遠かりし物にてはなく、強ち萬能ならず、故に、價値なき物とすべきものならず。寧ろ貧者は、神に遠きものなり。されど生命に限り有り、満足の制限有り、浮世はよくした物にて、宗教家の説く所も亦、一面研究の價値有る物なるべし。

富者、權威者の母精の不快は、充滿したる物質の禍因なる理由は、母精等の有する個々の満足が、不統一を來し、意想外の混乱を來す場合に於て、其緒を發する事は、實驗によりて証明する事を得るものなり。即ち彼等富者。權威者の母精等が、満足の目的物たる物質に對して、深き有所慾を確立したる場合、是等母精等の慾望は、各自孤立し、遂に分裂を來し、漸く齟齬し、衰退を來すに至るものにして、且其間に乘じて、他の外來的移精の侵畧等を受くるに至り、何時が破滅の彼岸に漂流するのやむなきに至

るものなるが如し。尙詳述すれば、是等の母精は先づ意識的不統一を來し、續いて宿体の生理的不統一を來すものなり。

故に精心統一療法の如きは、常に先づ欲念を除去して、而して後、施すに非らざれば効果少なきものの如し。況んや、富者に於ける場合に於て最も然りとす。

生活力は、昆虫の如き下等なる動物に有りては、單に衝動的自己實現の力と見做すも不可なく、高等なる人類を通して考ふるも、等しく、生命の希求實現の過程に過ぎず、而して、常に生理的統一を唯一の情件とするを以て、一朝母精の意識的不統一を來したる場合の如きに有りては、生活力は直ちに減殺せらるものなり。

以上の如きは云ふ迄もなく、靈理的に説明したる者なるも、古來斯くの如き

觀念は一般的に眞理と見做され來りたる、所謂舊思想なるものにして、現代科學にては絶体に否定せられたるものなりしが、當今に至り、或る一部の學者によりて深く實証せらるるに至り、再び一般科學の不充實性を補足せんと勉めらるるに至れり。要するに、眞理は如何に一面に吾人生活に不都合なる點を發見したりとするも、それは比較的微細なる時間的に起れる錯誤にして、絶体的に排除し去る事は不可能なれば、極力人類社會を應化せしむる努力こそ、眞文化とは云ふべく、茲に科學の一大欠點は見出さるる所なりとす。

靈理の信仰に對する利害少長に就て見るに、一般的に靈理に支配せられたる時代は、殆ど人類史の全生命なるにも係らず、科學の時代の實に短時日に過ぎざるに、而も、長足の新文明に對して、寧ろ不可思議なる程單調の

感有り、故に學者は直ちに、靈理的文明を舊思想なり、非文明的なりとして排斥するに、最も有力なる根據を保有する權威者なるなり。何人を以てするも、近代文明の恩澤に浴する事の幸福なる事を否定する者は非らざるべし。

然し科學なるものも、理知の產出物なる以上、何等か人知の因て來るべき根原に溯りて思索する時は、遂に科學其物も平面化し去る事は不可能となり。同時に、他の半面の不斷的實在に睡着するに至るものなり。况んや、ベルや、エヂソンや、マルコニーの如き發明大家は、等しく、常に人知以上の或るものに對して、崇敬の念を感せざる瞬間はなかりしこの一事を以てするも、科學てふ創生的術語も、遂に舊套を全然脱したる物ならざる事は事實なる如し、別段舊文明を外にして、新文明を產出したる如にてもな

く、事實に於て、科學文明も、所謂舊文明の繼承者たる風雲兒に過ぎざるものなり。故に舊思想と相抵觸する絶体的理由存せざるなり。然しながら、現代下に有りては、靈理論者は、常に科學者に對して、微弱なる辨護的對立者たるは事實なり。されど、來るべき新文化の繼承者は疑ひもなく、科學と他の半面とを並行したるものなるべき事は、近來の傾向より容易に推理し得べきものなり。

以上の如く見る時は、科學は時代の要求によりて出現したる一事態にして、人類の生活力に一大變異を來たしたる者にもなく、恰も、昆虫類の祖先の社會が現時の虫類の社會と等しきと同一に、人類の生命に對する意義に何等變更を來したる者にもなく、或る學者の言を借りて云へば一般的に、既存の平均を脱して、循環的に、連続せしめ様とする力の表現に過ぎ

ざるなり。只主觀的に觀察を環らせば、多少科學の發生と靈理的文明との間に、差異を見出し得べし。

一般的生物は、人類に比して理想的、最も自然的なる社會の發育を遂げた者にして、人類の舊文明も、科學文明も、何等相關する事はなきもの如し。而し、彼等も、其昆虫の如き微細物に至るまで、母精の經驗は單純なる反覆に止まらず、不斷に變移し、向上し行く事は、何等人類に行はるる物と大差なし。

彼の鴨が死せるが如き冬の湖上に浮遊せる時、太古其儘なる寂漠さと、天真なる優美さとの感に打たるるのみにて、彼等と、此煩雜なる文明とは、何の交渉をも引き起さざるべき事を想當すべし。然し、彼等も尙週圍の刺戟が、各母精の新經驗を生せしめ、彼等の生命實現に於て、時代、時代の

變異を持ち來すべきは、事實にて、彼等の母精は、未だ曾て經驗した事なき、銃獵家てふ大敵に備へざるべからず。

人類に於ても、初めての經驗に對しては、例へば、種子島たねがしまの名も知らざる昔人が、一發流れ玉を食らいたらんには、おそらく、何の原因によりて自己は害せられたるかを知覺せざるべし。然るに、現代の鴨かもは、筒先を見たる丈にて、既に自己に危害ある事を正確に知覺するなり。そは彼等の母精が、近代文明の武器に對する理解を保つ証據にして、彼等の文明も、即ち科學化したるなりと云ふべし。

昆虫の如きも等しく、多少時代の感化を受け、彼等の文明の異動する事は、當然の推理なり。彼の捕虫器の繁き都會に近き田野に生息する昆虫は、人類の足跡稀あしあとまれなる荒野あらのに有る者よりも、機敏きびんなる等一例なりとす。

昆虫の生活力は、其母精の希望の如何によりて異なり、其春季に於て、萬山廣野、皆新緑の褥しとねを擴ひろげて彼等を待つ時、百花各々婀娜あだやかなる媚こみを競ひて彼等に愁波しゅうはを送る時、彼等の仔体の膚はだの若々わかしく元氣の満ち満ちたる時、彼等の母精の希望は最も富み、昆虫の生活力は最も旺盛なるものなり。漸綠濃く、炎熱其度を増加し、彼等の仔体も成熟する夏は、彼等の生活力も亦最も成熟したる期にして、稻の穂先に重みが加はる時分には、既に彼等を満足せしむる柔軟なる若芽も少なく、花の蜜も得難くなり、彼等の母精はつくづく來るべきバニツクの悲慘に對して、再び警戒を初むるなり。彼の蟻の如く、蜂の如く、最大なる文化を有する社會に有りては、蓄財に最も忙はしき季節なりとす、只他の昆虫に於ける母精は、彼等の如く、自然の一部分を、善く彼等自己の保存の爲類化する程、偉大なる文明を建設

せざる爲、生殖の一途により、自己保存に最も適應したる卵に附着して存在する者にして、此期は恰も彼等母精の生活力は零に等しきものと云ふべし。されど蜂蟻と等しく大觀すれば、完全なる自己保存の合目的たるなり。昆虫に有りては、個生主義の者より蜂、蟻等の如く、家族主義、否群生主義に生存する者の方、よりよき文明を建設し居るは事實なれども、人類は未だ過度期に有り、現代文明は反て個人主義の社會によりて産出せられ、家族本位、或は國家本位の社會に有りては、思ひ切つたる文明は遂げ得ざりしもの如し。

昆虫の群生するものは、彼等の精の合成力も容易に求め得られ、彼等の文化も意想外に複雑となるも、人類の社會は、昆虫の如く、各個が純白ならざるを以て、人類の信仰が産出する神なる合成力を形成する社會は、彼等

が孤生したる時代よりも複雑、且大なる文明を建設し得るも、或る一部、或は時代によりては、是等の合成力が反て文運を阻害する事多く、彼の迷信によれる文明の障害等は、即ち合成力の弊害にして、遂に學者をして理想的神格に對して疑義を生せしむるに至れり。加之ならず、病氣等は、反て信仰の強き地方に多き等、最も不可思議なる現象多々有りとは云へ、等しく靈理を無下に敬遠して、遂に斯界の文化を妨げ、姑息、理不盡なる病狀に入らしめしは、各時代に於ける社會の罪と云ふべし。

抱擁やキツスの形式によつて、男女の包みきれざる熱烈なる愛情を交換する習慣性は、自然に生殖作用を節度するに至り、優生學上最理想的夫婦關係を保ち得る如きは、歐米人の夙に吾人に示す所にして、敢て疑はざるなり、而し是等にも弊害は有りて、一般的に下層社會の女子は結婚を避けて

簡易なる獨身生活を好むに至り、戦前の佛國等にては、人口は大に減退しつゝ有りたる次第なるが、此女子の一般的避結婚の傾向は要するに、生活難より來る事の方多き如にて、或者は職業婦人の獨身主義は、過度の勞務より、内的生殖機管の發育を阻害し爲に、人類の最大なる天分を避くるに至るものなりとなせり。

其他女子の運動好きにして、一見男性的氣分を發揮するものを以て或は男性的なる如き感なきに非らざるも、決して彼女等は病的男性にてはなく、只天真なる彼女等の性は、幼年時代と等しく、或部分に於て未分の状態に有るものにして、敢て變態的と見難きものなり。

總て生物の活動的なるは、其母精の發洩なる活動性を意味するものにして、彼等の活動的なるは、彼等の生存上の満足を意味し、従つて活動的生物は

等しく強健にして、生物として完全に近く、向上しつゝ有るものと断定し得るなり。

其他有機的好感覺が、各生物の生活力に多大なる關係を有し、従つて發育にも影響する物なり。就中、味覺の如きは食物の攝取によりて、其營養分を体内に補給し、新細胞を構成し、絶えず細胞の新陳代謝に備へ、生命の持續を目的とする物なるも、亦一面より解釋する時は、複雑なる生命の實現に際し、諸情念の靜調的統一作用を以て、見逃すべからざる從屬的一大意義と見做さざるべからず。

昆虫の如きは、常に無数の精を有するを以て、外界の複雑なる刺戟によりて、容易に精の解体、離散を來し安く、其れが爲、發育を阻害する事大なる事あり。従つて合目的なる法則は、總ての生物に共通なる食欲となりて